
緋弾のアリア 世界は俺のモノ

黒羊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 世界は俺のモノ

【Nコード】

N2198X

【作者名】

黒羊

【あらすじ】

増加する凶悪犯罪に対抗する為、武力を行使する探偵『武偵』の存在が当たり前の社会。武偵を育成する東京武偵高校に通う普通の生活を求める少年、遠山 キンジ。転校してきた天才武偵神崎・H・アリア。そしてもう一人……。

志々島 蓮（前書き）

注意点

- ・ 作者は原作知らず。
- ・ 展開はアニメメイン
- ・ 情報はウィキ&他の二次
- ・ 空白が多いのは携帯画面を考えて
- ・ パソコンに慣れる練習でもあるので更新遅いつす

志々島 蓮

世界は狭い。世界は広い。

誰だって今自分が見ている以上の世界は存在しない。見えなければ無いのと同じだ。しかし実際には見えない先にも世界は続く。続いていく。

世界は広い。世界は狭い。

しかしそんな事、志々島^{しじま} 蓮^{れん}には関係のない事だ。世界が狭かろうが広かろうが、

「世界は、俺のモノだ」

スン、と蓮が鼻を鳴らす。

とあるビルの屋上。吹きすさぶビル風に乗って何やら嗅ぎ付ける。

寝転がっていた体勢から上体を起こし下を覗き込む。見つけたのは、自転車で爆走している少年を自転車から引っ剥がすピンク色のツインテール少女。直後、余力で走っていた少年の自転車が爆発する。

一連を眺めていた蓮は鼻をクンクンさせて、ニヤリとした。

「面白い匂いがするなあ」

武偵高こと武偵高校はレインボーブリッジ南に浮かぶ南北およそ2キロ・東西500メートルの長方形の形をした人工島。学園島とも呼ばれる。

武偵とは凶悪化する犯罪に対抗する為に作られた国家資格を持つ者。武偵免許を取得すれば武装許可、逮捕権の取得など警察並みの活動が可能となる。警察と違うのは、武偵はそれに応じて金を得るという事。その代り、武偵法の許す範囲ならどんな荒事でもこなす。

そして武偵憲章第一条にはこうある。仲間を信じ、仲間を助けよ。
。少女 神崎・H・アリアは、武偵としてそれに準じ自転車に爆弾を仕掛けられた不幸な少年を助けた。

しかし爆発に巻き込まれ二人して吹っ飛んだ先でその少年に服を脱がされ（誤解）胸をジロジロ見られた（過剰）とあって、アリアは今すぐにでもこの少年の頭に風穴を明けてやりたかった。

そこに水を差すように現れたのは、先ほど少年を追走していたのと同じタイプの短機関銃装備の自律型走車。それも6機も。

ひとまず少年への制裁は置いておいて自前のガバメントで応射していたのだが、一体何があったのか、少年の様子が変わった。

さっきまで同じ武偵にしては情けないと思うほど使えなかったのに今は、

『ご褒美だ、お姫様』とか。

『アリアを守る』とか。

こつちが赤面するセリフを涼しげに吐いている。まるでというか、完全に別人だ。

忠告も聞かずあつさり遮蔽物から身を晒す少年。6機の自走車はここぞとばかりに短機関銃を撃つ。

正直、アリアは目を奪われた。

少年は短機関銃の弾丸を完全に見切り紙一重で躲し、懐からベレッタを取り出した。銃声は一発分。並みの者ならそう聞こえただろうが、Sランク武偵であるアリアはそれが6発を一瞬で撃ちきっていた事を見抜いた。

（　速い！　）

目を凝らしていなければ見逃していた。そして射撃も精確だった。6発の弾丸は狂いなく短機関銃の銃口に吸い込まれ、自走車は残らず破砕した。

戻ってきた少年はおもむろに自分のベルトをアリアに投げ渡す。スカートのホックが壊れてしまい、アリアが遮蔽物から出て来られない事までお見通しらしい。

「こ、こんなんですっきの事を有耶無耶にしようなんてさせないわよ！ それにあんな玩具、あたし1人でどうにか出来たんだからね！」

「それは悲しい誤解だよ、アリア」

気障ったらしい仕草を交えて喋る少年。

本当にさっきまで自転車で逃げ回っていた人物と同一人物なのかアリアは不安になってきた。

「！？」

気付いたのは二人同時だった。

新たな自走車がさらに10機も現れる。しかしアリアも少年も遮蔽物から身を晒してしまっていた。少年の高速射撃があっても破壊しきれない。

短機関銃が今まさに火を噴こうかという瞬間、アリアは目を疑う光景を目の当たりにする。

別の少年が空から降ってきた。

自走車の1機を踏み潰す形で現れた少年。一体どこから、どうやって。アリアは何一つ分からなかった。

自走車を粉々に踏み砕き、地面を陥没させる程の高さとなると相当な筈だ。まして一瞬見えた少年がパラシュートの類を装備していたようには見えなかった。だというのに、少年は何事もなかったように平然と自走車の残骸を踏みつけて立ち上がった。

紅毛碧眼に長身痩躯。恰好はアリア達と同じ武偵高の制服だった。だが防弾効果のある制服なのに前をはだけさせて着ている為意味がない。

「……………」

アリアはその少年から目を離せなかった。ただしこれは、先ほど超人的な技術を見せた隣の少年の時とは違う。アリアが目の前の少年から目を離せないのは 恐怖からだった。

蓮はビルからビルに飛び移り例の少年少女を追う。到着するとすでに一悶着あった後なのか残骸が散らばっていた。

つまらなそうに肩を竦める蓮だったが、上空からさらに10機の自走車が二人に向かっていているのを発見して笑みを取り戻す。躊躇わず、ビルの屋上から少年達のもとへ飛び降りた。

結果、1機の自走車を下敷きにするがそんな事蓮が気にするわけもない。気になるのは少年達だけ。

やはりというのか、警戒心丸出しだった。少年に至っては少女を守るように立ちふさがる。

しかしそれすら蓮にはどうでもいい。蓮が気になるのは少年達そのものであり、彼らの反応ではない。そんなもの蓮はどうでもいい。

「おい危ないぞ!」

少年の方が慌てたように叫ぶ。

自走車が突然現れた蓮を邪魔者と判断したのか、短機関銃を一斉に蓮へと向ける。蓮は群れの中央に落ちてきた形だったので逃げ場がない。

「危ない？」

短機関銃が一斉に射撃を開始。

「俺が？」

1機が崩れ落ちた。少年少女の目が驚きに見開かれ、蓮の右手に注目する。

蓮の右手に握られていたのは短機関銃。それも半ばからへしゃげ、最早使い物にならなくなっていた。

「俺が危ない？」

自走車は冷静に、迅速に、淡々と再び蓮に狙いをつける。しかしまた1機。今度は短機関銃を支える支柱が振り切られる。

「俺は絶対に死なない」

そう言つて蓮はまた1機破壊する。

「何故か？ それは此处が俺の世界だからだ」

まるで紙屑でも千切るように、銃を備えた鉄の塊を素手で蹂躪して

いく。

「俺が信じればなんでも出来る。俺が願えばなんでも叶う。だから此処は俺の世界なんだよ。だから世界は俺を中心に回ってるんだよ」

少年達は蓮が何を言っているのかわからない。ただただ、その圧倒的な『暴力』に魅せられていた。

「だから俺は死なない。絶対に……死なないんだ」

10機がものの数十秒でスクラップにされていた。

傷一つ負わずに10機の自走車を破壊した蓮。しかし彼は数秒後にはそんな事忘れてしまう。否、忘れる以前に、記憶するほど価値あるものではなかった。

蓮が少年達に視線を向けると、少年がより一層鋭い目つきでバタフライナイフを構え蓮を牽制しながら少女を庇う。しかし、そんな事にも構わず蓮は大胆に少年達に近づく。

「あ、あんた何者よ！」

震えが見える声で少女が叫ぶ。蓮は首を傾げた。

「武偵だけど？」

着ている制服を強調して『当然だ』というような蓮。クンクンと鼻が動いた。

「あれ？」

という声を少年が聞いた時、蓮はいつの間にか少年に顔を近付けていた。

「お前さっきと匂いが違う？」

「……っ！？」

蓮の接近に気付けなかった事に驚いて距離を取ろうとする少年。既にその時、蓮は今度は少女の首筋に鼻を近付けていた。

「甘い匂いだ」

少女はゾクリと体を震わせて顔を真っ赤にする。咄嗟に太もものホルダーから二丁拳銃を抜くが、蓮がその手を掴む方が速かった。強張る少女に顔を近付ける蓮。

「面白いな、お前」

「女の子に強引に迫るのは感心しないな」

背後から蓮の首に突きつけられるナイフ。蓮は尻目で少年と視線を交え、笑った。少女の手を解放する。

「お前じゃ俺を殺せない」

「なに？」

両の手をポケットに突っ込み、ナイフなど気にも留めないで蓮はそ

の場を立ち去った。

同居人パート2

蓮は久しぶりに武偵高への道を歩いていた。登校するのがいつ以来だか思い出す事も出来ない。といつても、既に日も沈みかけており、授業に出る気などさらさら無かった。

下校する生徒の流れに逆らう形で放浪する蓮。無軌道であるが無目的というわけではない。ようやくそれらしい人物の後ろ姿を見つける。

「峰^{みね} 理子^{りこ}ってのはお前か？」

唐突な上に不躰な問い掛けだが、何せ蓮は彼女の事を知らない。名前も昨日知ったばかりだ。

蓮の言葉に少女は足を止めると振り返る。ゆるいパーマのかかった長い金髪をツーサイドアップに結った少女。身長は昨日のピンクツインテール少女と良い勝負だが、胸に関してはこちらの少女の圧勝といった所か。

「あれー理子有名人？」

見知らぬ男子に話し掛けられても愛くるしい笑顔を振りまく少女。

「それともそれとも愛の告白？ キャー理子ってば罪な女」

「残念だけど告白じゃあない。腕の良い情報通は誰かって訊いたらあんたの名前が出て来たんだ」

「なーんだ。つまんない」

ぷー、と頬を膨らませる理子。

峰 理子。インクスタ 探偵科Aランク。

いつも自前の改造制服を着ていて、発言も行動も馬鹿丸出しだが腕は確かだという噂だ。

「それで何が知りたいの？」

「人を探してる。ピンクのツインテール少女と、昨日自転車で爆死しかけた奴。どっちも此処の生徒だ」

「……ふーん。なんでその人達の事知りたいの？」

「面白そうだから」

両手を後ろで組んで無防備に蓮に近付いてくる理子。体を密着させて顔を寄せてくる。

「本当にそれだけ？」

その表情は数瞬前までの能天気さが消え失せていた。

蓮は自ら理子に顔を近付ける。下校時刻も過ぎて人が少ないとはいえ、見られでもすればあらぬ噂の一つや二つ流れそうな光景だった。

「わあ、大胆だね」

そんな事分かっているだろうに、理子の方も退かない。

「匂うねえ」

スンと鼻を鳴らして、蓮は理子の耳元に口を近付ける。

「俺、猫かぶってる女の子好きじゃないんだよね」

「！」

理子は素早い動きで蓮から距離を取った。

「あと香水も苦手」

どこまでもふざけた調子の蓮だが、理子の方はそれを失いつつあった。

「……お前、誰だ？」

「おいおい。探偵科のAランクだろ？」

口調まで変わった理子に対しても態度は変わらず、薄く笑う蓮。

「少し嘘が取れたな。そっちの方が好みだ」

飄々とした蓮の態度に苛立ったように、ギリリと歯を鳴らす理子。

「理子はお前なんか知らない。見たのも初めて」

「学校来ないからな」

「何で？」

「来る義理もないし。つまないだろ」

『でもさ』と蓮は続ける。口元にうつすら笑みを浮かべて。

「最近楽しそうな奴等を見つけてさ。興味あるんだよ」

楽しいとか楽しくないとか、子供みたいな理由を語る蓮。だが理子は、蓮を前にして背筋に嫌な汗をかいている事を自覚する。内にあるサイレンが、眼前の男に対してけたたましく鳴り響いている。

「それ教えて理子に得あるの？」

「うーん。本当は金ならいくらでも払うつもりだったんだけど、お前別に金欲しくないだろ？」

本気で悩むような仕草を取る蓮。ややあって、蓮は結論に至る。

「なら、命を助けてやる」

「……っ」

冗談のような言い方で、しかし理子にはそれが冗談でない事が理解出来た。もはや懐の銃を抜く事すら出来ない。体が竦んでいた。

蓮の発言は理子のピンチを救ってやるという意味ではない。『今この場で、殺さないでやるから話せ』そう脅しているのだ。

「なあ、良い条件だろ？」

底抜けに穏やかな笑顔で蓮は言う。一步、二歩と理子に詰め寄る。

理子は震える体に鞭打って両手を挙げた。

「……何が、知りたいの？」

蓮は歩みを止める。

「名前と学科だけでいい」

そんな簡単な情報と己の命が天秤にかけられたのか、と内心理子は悲しくなる。

「女の子の方は神崎・H・アリア。最近強襲科アサルトに転入してきたSランクの武偵。男の子の方は多分、遠山 キンジ。強襲科から理子と同じ探偵科に転科した。ランクはE」

「ありがとう」

ふんふん、と頷いて立ち去ろうとする蓮。

「待ちなよ」

理子の呼びかけに蓮は足を止めた。

「これじゃあアンフェア。お金は要らないけど、理子のお願い一つ聞いて」

震えを押し殺して絞り出した言葉だった。

理子の言葉はその通りかもしれないが、蓮は『情報の代わりに命を助ける』と言っている。つまりその提案を蓮が呑むと言う事は、理子の命を保障しないという事だ。

理子は今度こそ抜けるように懷の銃をキツく握る。
振り返った蓮は微笑する。

「やっとお前自身から本気の言葉が出たな」

「え？」

蓮が何を言っているのか理子には分からなかった。

「いいぜ。そういうのは好きだ。願いつてのは？」

「それは……また今度」

最後に自分を取り戻した理子はウィンクする。蓮は表情一つ変えずに応える。

「別にいいが、有効期限はないし保障も無いからな」

つまり、いつでもいいけど願いを聞くかはわからない。

蓮はそうして今度こそ立ち去っていく。

残された理子はその場にペタリと座り込む。強がりも限界だった。

『やっとお前自身から本気の言葉が出たな』

「……………」

理子の耳に、この言葉が暫く残った。

遠山 キンジは帰路につきながらため息をつく。というのも、先日
から厄介なネコが住み着いてしまったのが原因だ。

神崎・H・アリア。彼女が自分の命を救ってくれた恩人でもあり、
現在一番厄介な人物である。キンジは手元の資料を眺める。この資
料は今日、友人の理子に頼んで集めて貰ったアリアについての情報。
見かけによらず良いとこの貴族様であつたり、双剣^{カトラ}双銃のアリアと
呼ばれるSランクの武偵であつたり、クォーターであつたり我儘だ
つたりももまんが好きだつたり……。後半の情報は自己収集でもあ
る。なにせ彼女は今、家に住んでいるのだから。

勿論、キンジが招いたわけではなく許可したわけでもない。彼女が
勝手に押しかけてきたのだ。それだけではない。アリアはキンジに
『奴隷になれ』などともんでもない発言までしているのだ。

アリアは腕は最高ながら、未だその实力に見合うパートナーがいな
い。

そこでアリアはキンジに目をつけ、パートナーになるよう迫ってい
るのだ。そして残念ながら、キンジはそれに心当たりがある。

普段の自分はお世辞にも良い腕とはいえない武偵だが、とある体質で、発動さえしてしまえばその実力がSランクのARIAにも劣らない実力を発揮してしまう。

それをARIAに見られてしまったのだ。

しかしキングはARIAのパートナーになるつもりはない。それどころか、武偵をこのまま続けるつもりもない。

「兄さん……」

武偵を続ける事に意味がない事を自分は知っているのだから。

ふと、資料を眺めて思い出す。理子にはARIAとは別にもう一人調査を依頼していたのだ。

あの時現れた赤毛の少年。たった一人で短機関銃を装備した10機の自走車を破壊し尽くし、あの時の自分　ヒステリアモードの自分の懐にあっさり入ってきた少年。

その正体を知りたかったが理子でも調べられなかったらしい。正確には、情報は出てきたが全てあきらかな偽装だったらしい。彼についてわかったのは名前だけ。

それと理子はこんな事も言っていた。

『こいつには近付かない方がいい』と。

いつものお馬鹿キャラではなく、真面目な顔で。

そしてそれには直接相対したキンジ自身同意見だった。あの男は、危険だ。

「ま、好き好んで関わりやしないさ」

なにせ自分は普通の生活を求めている。その為にもまず、家に住み着いている貴族様をどうにかしなくては。

現在の自分の家であり、男子寮の扉を開ける。期待はしていなかったが、未だ玄関に彼女の靴がある事に残念な気持ちになる。

「あ、あんだなんでここにいるのよ!」

その彼女が居間で大きな声をあげていた。しかしその声はどうやら自分に向けられているわけではないようだった。

一瞬の思考。この部屋を訪れる人物を検索してキンジは青ざめた。

さては同じ武偵でもある幼馴染とアリアが鉢合わせたのかと。

幼馴染への言い訳、アリアの説得。どちらも自分に可能とは思えないが、部屋ごと吹き飛ばされてはかなわないとキンジは命を賭して居間へと走る。

「違うんだ白雪! こいつは」

言いかけてキンジはやめた。否、喋れなくなった。

そこにいたのは二丁拳銃を構えて敵意丸出しのアリアと、予想外の人物。勝手にキンジの部屋に上り込んでいるばかりか、テレビゲー

ムをしている赤毛の男。

キンジは彼を知っている。といっても名前だけ。

「志々島 蓮……」

「おかえり、遠山 キンジ」

数分前に関わるまいと決めた筈の男が、自分の部屋で出迎えてくれた。

理子により目的の人物の名前を入手した蓮は、ひとまずキンジの部屋へ訪れた。二人の内なぜキンジだったかといえば、単純に情報が手に入った順。つまり理由はない。

訪ねたはいいが誰もいなかったので不法侵入したのも実にどうでもいい。

テーブルを挟んだ向こうでキンジとアリアが並んで座っている。

「なんだ。お前ら同居してたのか」

「ど、どど同居……！」

「違う」

半分冗談だったがアリアの方は面白い具合に顔を真っ赤にする反応をみせ、キンジの方は比較的冷静に否定してきた。

キンジの部屋に来たのは正解だった。まさか目的の二人が一緒に住んでるとは。

「その様子だと、二人とも俺の事調べたみたいだな」

蓮の言葉にアリア達は否定しない。

蓮がそうしたように二人が自分の事を調べるのは当然だ。

「志々島 蓮」

アリアの方が口をひらく。

「父親はアメリカ人、母親が日本人のハーフ。両親共に五年前に事故で死亡」

「自己紹介の手間が省けて助かるよ」

「これを信じろっていうの!？」

興奮したようにテーブルを叩くアリア。

「あんたが武偵に引き取られる形で入学したのがほぼ一年前。それまでなんの訓練も受けていないし、両親ともただの一般人!」

直接蓮の『力』を見ているアリアには信じられない。

改造人間だと言われればまだ納得出来るのに、蓮の経歴は普通に尽きる。明らかな偽情報だ。

「まだあるわ」とアリア。

「授業にはほとんど出ない。受けたクエストも入学直後の一度だけなのに！ あんたは2年に進級してる」

明らかな単位不足の筈だ。隣のキンジは知らない情報だったらしく驚いている。

「それ以上に納得いかないのはあんたの学科よ」

「学科？」

キンジが首を傾げる。蓮が続きを話すつもりがないことを確認して、アリアが答える。

「無所属科リベルテなんて聞いた事ないわ！」

武偵は必ずその能力に応じた科に振り分けられ、それに応じた単位を取得していく。だから無所属科なんてものは存在しない。

しかし蓮は無所属科である。正確には、どこに振り分ければいいのか学校側が判断出来なかったただけなのだが、蓮は親切に説明するつもりはない。

「そんなことどうでもいいだろ」

テーブルに片肘をついて手に顎を乗せる。超然とした蓮の態度に、キンジ達は緊張感を高めた。

「しばらく俺とチーム組もうぜ」

「「はあっ!!?」」

「それと俺、しばらく此処住むわ」

「はあっ!!!?!」

キンジの声が一際大きかった。

ファースト・ミッション・エンド

蓮は大欠伸をして起き上がる。見慣れない部屋に思わず頭に疑問符を浮かべるが解決。

「そついえば昨日からキンジの部屋に泊まってんだっけ」

自分で言い出したことながら忘れていた。

ぼさついた赤毛を掻きながら、寝ぼけ眼でざっと部屋を見まわす。キンジ達の姿はない。当然だ。登校時間は既に過ぎている。二人は学校に行っている筈だ。

勿論それは同じく生徒である蓮もなのだが、昨日アリアが言ったようにまともに登校していない蓮にとっていつも通りの朝だ。

起き上がり冷蔵庫へ。キンジの部屋だが躊躇いなく物色。牛乳を掴みパックのまま口に傾けた。

牛乳を飲みながら、蓮は昨日の事を思い出す。

「どいつもこいつも、俺は武偵を辞めるんだって言ってるだろ。だからお前らとは組まない」

蓮の『チームを組め』という言葉に頑なに反対したのはキンジの方だった。

どうやらアリアの方は蓮より一足先にキンジにアプローチしていたらしい。

「お前の意見なんか知るか」

「そうよ。あんたはあたしの奴隷なのよ？」

「お前ら……」

もはや我儘を通り越した蓮たちの自己中発言にキンジは頭を抱える。

「条件がある」

蓮とアリア、この二人は自分の手に負える相手でないと理解したキンジが人差し指を立てる。

「1回だけだ」

「1回？」とアリア。

「組んでやるが1回だ。最初に起きた事件を1件だけ一緒に解決してやる」

思案するアリア。やがて渋々というように頷く。

「わかったわ。その1件であんたの実力を見極める事にする」

「どんな小さな事件でも1件だからな。お前もそれでいいな、志々島」

「蓮でいい。ま、なるべく大きな事件が起きてくれるよう祈るさ」

『不謹慎』とアリアに怒られた。

蓮は別にアリアのようにパートナーを探しているわけでも、キンジのように武偵を嫌っているわけでもない。

あの二人を見た時、蓮は心が躍った。それはそう、恋心に似たものかもしれない。

面白いと思った。それ以上の理由もそれ以外の理由も、蓮には存在しない。

一つ気になる事があるとすれば、出会った時とキンジの匂いが違う事。僅かな違いだが確かに違う。

匂いが変わるなんて事は初めてだ。

その原因を知るのもまた、蓮の楽しみの1つでもあった。

ポケットで携帯が振動している事に気付く。蓮は電話に出た。

『事件よ！ 早く来なさい！』

出るや否や怒鳴り声。切羽詰まったその声に、笑みを抑えきれない。

「願いが届いたかな？」

信じてもない神様に蓮は感謝しておいた。

「出迎えにへりつてのは気分が良いな」

通信方法をインカムに変えた蓮の第一声。

アリアからの連絡を受けて部屋を出ようとした蓮を彼女は制止する。
迎えが行くからそこで待つてろと。

直後、部屋に横付けされたのは車でも船でもなくへりだった。

蓮がへりに乗り込むと先客がいた。

長大な狙撃銃を背負うには頼りない線の細い少女。

「あんたも武偵？」

へりの音、プラスヘッドホンを着けたままの少女にお構いなく蓮は

喋りかける。

少女は無言だが、コクリと頷いた。

「俺は志々島 蓮だ。よろしく」

「レキです」

抑揚の無い喋り方。最低限の応答しかない機械のようなレキに、しかし蓮は気分を害するどころか上機嫌だった。

クンクンと鼻が動く。

「あんたも良いな」

「……………?」

レキは蓮の言葉の意味がわからず首を傾げる。が改めて追求するつもりも無いらしい。

キンジ、アリア、理子、レキ。

此処最近出会った人物達を蓮は思い浮かべる。

「こんなたくさん面白い奴がいるなら、学校ちゃんとしてりや良かったかな」

『そういう事は事件が終わってからにしないさ』

再びアリアから通信。おそらくレキにも同様に声は届いているだろう。

『事件はバスジャック。ジャックされたのは武偵高の通学バス。犯人はおそらく武偵殺しよ』

武偵殺し。確か先日、キンジの自転車に爆弾を仕掛けてふっ飛ばそうとした犯人だったか、と記憶を検索。

「キンジ、ラッキーだったな」

『……うるせえ』

蓮の軽口にもキンジは曇った声しかあげない。

『あたしとキンジは今車でそのバスを追ってるわ』

「ああ、見えた」

ハッチを開けて蓮は下を覗き込む。法定スピードを無視したスピードで走る黒いバンが見えた。

『蓮はトンネルに入る前にあたし達と合流。車を止めるから——』

「いや止めなくていい」

振り返ると、レキガリュックサックのような物を差し出してきた。降下用のパラシュートだ。

「いらねえよ」

なんと、蓮はそれを受け取らずにハッチから外に身を投げ出した。

あっという間にヘリが小さくなる。近付いてくる黒いバンの屋根に、蓮は四つん這いで着地した。屋根が僅かに凹み、インカムの向こうから可愛らしい悲鳴。

恐る恐るといった様子で窓から顔を出したアリアと目が合う。

「よお」

「あんた本当に人間なの？」

最もな質問だったが、蓮は涼しい顔で言い切った。

「当たり前だろ？」

『ありえん……』とキンジが憂鬱な調子で言った。

止める時間が勿体ないという蓮の進言で、蓮が屋根に張り付いたまま車は走る。トンネルに入る直前にバスを視界に捉えた。

トンネル侵入直後、バスと並列に走っていた無人スポーツカーが短機関銃をバスに撃ち込んだ。けたたましい発砲音と共にバスのガラスが粉碎される。

無人車はさらにバスに向けて発砲しようという挙動を見せる。

「アリア、弾を1発俺に放れ」

蓮の言葉に対してアリアは一切質問せず、窓から弾丸を1発蓮のいる屋根に放った。

凄まじい空気抵抗をまるで微風のようにいなす蓮は、危なげなくアリアが投げた弾をキャッチ。それを素手で投げた。

いくら拳銃の弾とはいえ、投げて当たっても痛いので済む。ましてや車に当たった所で傷が残る程度だ。

しかし、蓮投げた弾はまさに弾丸の如く空気を切り裂き、無人車の短機関銃に見事命中した。命中させたばかりか短機関銃の支柱が折れる。

「キンジ、ハンドル持ってなさい！」

言うよりも早く、アリアは上半身を窓から出す。ツインテールを靡かせて、双銃の引き金を引く。

銃弾は的確に無人車の後輪を撃ち抜く。コントロール不能となった車はスピンしながら壁に激突して爆散した。

「良い腕だ」

「ありがとう」

蓮の賞賛にアリアは微笑みで答える。

普段はアレだったが流石Sランク武偵。実力は伊達ではない。

「キンジとあたしでバスに乗り移るわ」

繋がっているインカムからキンジが喚いているのが聞こえたが、リアも蓮も相手にしない。

「蓮はもしもの時の為に待機。運転変わってもらえる？」

「俺は運転が苦手だね」

嘘ではない。

「それに 客だ」

蓮が後方を見るよう二人に促す。背後から先程と同じ無人スポーツカーが3台接近してきているのが見えた。

「あれは俺がやる。時間を稼ぐから爆弾は任せた」

言うや否や、蓮はバンを蹴りつけて飛翔。何の躊躇いもなく、鳥のように翼があるわけでもなく、ワイヤーで吊られているわけでもないのに、蓮に恐怖など一切見えない。

1台の無人車のボンネットに着地する。

車に装備された短機関銃の銃口が即座に蓮に向けられる。

発砲されるより先に蓮は銃口を素手で掴むと無理矢理短機関銃を別の無人車に向けた。

撃ち出された弾丸が青いカラーリングの無人車のどてっ腹に次々穴を穿つ。ガソリンに触れたのか盛大に爆発した。

次に黄色の無人車が、乗り移られている無人車ごと蓮を撃つ気なのか銃口を向けてくる。

蓮は再び跳んだ。飛翔した蓮を追って弾丸が撃ち出されるが、弾はまったく蓮に当たらない。結果、蓮は黄色の無人車に着地を果たす。まるで驚愕したかのように発砲を止めてしまった短機関銃に、蓮は微笑みかける。拳を振り上げた。

メキッ！ と凄まじい音をさせて、蓮の右拳が無人車のボンネットを貫く。肩まで突っ込んだ腕を引き戻して再び蓮は飛翔。数秒遅れで車が爆発する。

後方宙返りを決めて再び蓮は赤いカラーリングの無人車に戻って来た。

ぐるりと短機関銃が蓮を狙うが、石ころを蹴るような簡単な動作で支柱が折られ、銃は道路を転がって後方に消える。

蓮は高速移動する車の上を冗談のように軽やかに飛び移り、僅か数分で3台を無力化してしまった。

唯一の攻撃手段を失った無人車はただ走るだけ。その上で悪鬼のような笑みを浮かべて離れたバスを見る。まだ爆弾が解除された様子はない。それを眺めていた蓮の隣りを、4台目となるシルバーカラーの無人車が走り抜ける。しかし、蓮はあえてそれを見逃して、走るだけとなった無人車に腰を下ろす。

蓮は別に人助けがしたいわけではない。武偵として働きたいわけで

はない。

「さて、お手並み拝見」

今はただ、自己の興味のままだ。

犯人は装置を使ってバスを監視している。その見立て通り、キンジがバスの屋根をつたうと通信装置を発見した。

「アリア！ 通信装置は外した」

「この馬鹿！」

車体下で爆弾処理をしていたアリアが顔を出すなりそう罵る。外に出るなという言いつけを守らなかった事を怒っているらしい。

「馬鹿とはなんだ。お前が爆弾を解体している間に俺はこつちを」

「迂闊だつて言ってるの！」

褒められたかったわけではないが、キンジは自分なりに出来る事を考えて行動した。そしてその成果があった。

なのに彼女は頭ごなしに怒るだけ。

「無防備過ぎるわ。早く車内に戻って！」

キンジは不満を堪え、通信装置を舌打ちまじりに投げ捨てる。
その直後エンジン音。

見ると後方に追いついてきた無人車。

（無人車は蓮が相手してる筈じゃ……）

蓮の規格外の力に無条件に安心していたが、よく見ればあの無人車は最初の3台と別の色をしている。増援が来て取りこぼしたのかもしれない。

無駄な思考だった。そんな事を考えるより先にさっさと車内に戻るなり伏せるなりすれば良かった。

「キンジ！」

アリアの声で我にかえり気付いた時には、無人車の銃口がキンジの頭に狙いをつけた後だった。

「……………」

情けなくも言葉も出なかった。ただ迫って来る弾丸をキンジは見つめる。

「キンジッ！」

体が押し倒される。飛びつくように胸を押ししたアリアがガバメントを抜く。

発砲。同時に耳元で風が裂ける。

アリアの放った弾丸は無人数のタイヤを破壊し、コントロール不能となった車はスピンして消えた。

安堵するキンジ。その胸に温かい感触がある事に気付いてハツとした。

「アリア？」

胸の中で、少女は額から血を流したまま動かない。

「アリア！ アリア！！」

何度も呼び掛けるがアリアは目覚めない。

『私は、一発の銃弾』

インカム越しに聞こえる儀式じみた詠唱。狙撃科Sランク、レキの声だ。併走するヘリから放たれた弾丸は、まるで魔法のように障害物をすり抜けて車体下の爆弾の留め具を破壊する。

東京湾に落下した爆弾が一瞬の間を置いて爆発。

水柱があがり、キンジ達に水を激しく打ち付ける。キンジにはまるでそれが、自分の愚かさを責めているように思えた。

腕の中で眠るアリアの血は、それでも綺麗に流れてはくれなかった。

亀裂

学園の屋上で寝転がる赤毛の美男。

「だーれだ」

「嘘つきだろ」

即答すると、蓮の目をふさいでいた手が退かされる。視線だけやると、隣で体育座りしている理子が不機嫌そうに睨んでいた。

「相変わらず嫌な奴」

普段の彼女を知る者からしたら信じられないとげとげした雰囲気。思わず腰が引けてしまいそうな眼光にも、蓮はどこ吹く風といわんばかりに無関心。

「バスジャック、レンレン達が止めたんでしょ？」

わざとらしいほどうも通りのふわふわした声色で理子が言う。

バスジャックは止まった。負傷者は何人か出たが、死者も出ず、橋が爆破されるという大事故も起こらず事件は解決。武偵なので表彰される事などないが、蓮たちの働きはお手柄だった。

しかし彼女は別に、律儀に賛辞の言葉を持ってきたわけじゃない。ニイツ、と理子の口が妖しく歪む。

「でもアリア怪我しちゃったんだっけ？」

そう、アリアは事件の過程でキンジを庇って額に怪我を負った。幸い大したものではなかったが、傷跡が残ってしまうのだとキンジがわざわざ伝えに来た。キンジはキンジで悩んでいるようだった。

「それがどうした？ そんなこと言いに来たのかよ」

クスクス笑う理子は、寝そべっている蓮に重なるようにしなだれかかってきた。

「レンレンは冷たいねえ。理子の火照りも冷ましてよ」

そういつて蓮のはだけた胸板に舌を這わせる。蓮の体にまたがって、妖艶な笑みで蓮を見下ろす。

「けどらしくない。怒ってる？ アリアが怪我しちゃって」

蓮は何も答えない。

「意外だよ。キー君ならともかくレンレンがそんなに怒るなんて。アリアが怪我したから？ 武偵殺しに怒ってるの？ それとも、守れなかった自分に対して？」

理子が蓮の胸に頬を押し付ける。

「理子嫉妬しちゃう」

男なら理性とのせめぎ合いがある場面だが、蓮には一切動揺は見られない。理子にはそれが不満だった。

「全然楽しくなかった」

「え？」

「レキって子はそれなりに楽しめたけど、あの2人は全然駄目だ。正直失望した」

理子の言うとおり蓮は確かに不機嫌だったが、それは理子が言ったような理由からではない。

蓮はキンジとアリアが気に入って一緒にいる。基本的に周囲の目も声も、常識も法も、善と悪すら蓮の行動は縛れない。蓮の行動概念は彼自身の欲求に従っている。

そのほとんどが直感で、初めてキンジ達に出会ったときも、その直感が訴えたのだ。この2人は面白いと。

ただそれだけ。だがそれ以上の理由は蓮にはありえない。

だがバスジャック事件はその期待を裏切る形となった。アリアはつまらない事で傷を負い、キンジに至っては結局初めて会った時のような冴えた動きの一つもなく事件を終えた。

つまらない。事件の結果は関係ない。蓮にとって重要なのは過程。この前は不完全燃焼どころか、燻りの一つも生まれなかった。

「ならば、レンレン……理子と組まない？」

くふつと理子は笑う。

「あの2人より理子の方が蓮の事満足させてあげられると思うよ？」

奇妙なニックネームではなく、『蓮』と名前で呼び本気を示す理子。

「それも面白そうだな」

「ほんとっ！？ 理子嬉しい！」

満面の笑顔で抱きついてくる理子。『だが』と蓮は続ける。

「証明してくれよ。お前という方が楽しいって」

ピクンと理子は反応を示し、しばらく沈黙を挟んでひっついていた体を離す。

「いいよ、見せてあげる。アリアより理子の方が上だって事」

理子の瞳に、今までよりさらに強い決意めいた炎が見えた。理子は胸元から1枚の紙を取り出す。チケットだった。ロンドン行の飛行機の。日付は今日。

武偵殺しはカージャック、バイクジャックから始めてシージャックである武偵を仕留めた。そしてそれはおそらく直接対決だった。なぜなら、その時だけ遠隔操作の電波が傍受されなかった。それはつ

まり、犯人自身がその場にいたから必要がなかったからだ。

そして多分今回の犯人はそれをなぞっている。

「どういうこと？」

銃を構えて先行するアリアが尋ねてくる。

「バイクに代わってチャリ。車に代わってバス。そして」

船に代わってこの飛行機。

今、アリアとキンジが乗る飛行機が例の武偵殺しにジャックされている。狙いは相変わらず武偵。2人は犯人の挑発にのり、1階のバーに向かっている。

「でもそれがこのフライトだっていう確証は……」

「奴はかなえさん……アリアの母親に罪をきせた。これはお前への宣戦布告だ」

「最初からあたしがターゲットだったってことね。なめた真似してくれるじゃない」

アリアは歯を鳴らす。彼女が武偵として躍起になって犯人を捕まえている理由は、彼女の母が濡れ衣によって捕まえられているからだ。彼女はその犯人たちを捕まえたい。そしてその1人が、武偵殺しだ。

ようやくキンジ達はバーに到達する。バーカウンターには1人の女性が生かされているのが見えた。

扉を蹴ってバーになだれ込み、キンジ達は女性に銃を突きつけた。

「ふふ、今回も綺麗にひっかかってくれやがりましたね」

その口調は間違いなく武偵殺しのものであった。女性は振り返り、顔に手をかける。

ビリビリと女性の顔が破け、素顔が露わになる。その正体に、キンジは動揺が隠せなかった。

「理子……？」

「ボンソワ。キンジ……」

その人物はキンジの友人であり、同じ武偵高の生徒である峰 理子だった。

「そして、オルメス」

「あんた一体……」

「理子・峰・リュパン4世。それが理子の本当の名前」

リュパン。それはあまりにも有名な大怪盗の名前、アルセーヌ・リュパン。

勿論本人ではない。彼女はその子孫。

「理子は理子である為に、お前を超える。どいつもこいつも私の事を4世4世……4様！」

理子は理子だ！ お母様が付けてくれた名前がある！」

血を吐くように叫ぶ彼女の姿は、キンジが今まで知る彼女とはかけ離れていた。まるで別人のような……否、今まで知る彼女が本当の彼女ではなかったのだ。今の姿が彼女の本当の姿。

「イ・ウーに入ったのも、キンジをアリアとくつつけたのも全部その為」

「どういうことだ？」

「キー君のチャリに爆弾を仕掛けた時からって意味」

ウインク混じりに理子は言う。

「あ、当然だけど、お兄さんの事件の犯人もリッコです」

キンジの手が震える。兄の仇が、いままで友人として付き合い合ってきた理子だったなんて信じたくなかった。しかし理子が言葉を紡ぐ度に、それが真実なのだと思い知らされる。

「……っ」

唐突に機内が揺れる。バランスを崩したキンジが転倒し、不覚にも銃を手放してしまう。額に、銃口が押し付けられた。

「ノンノンダメだよキンジ。今のお前じゃ戦闘の役には立たない」

悔しいが理子の言うとおりだった。今の自分では戦力にはなりえない。だが、彼女は違う。

「理子！」

アリアがガバメントの引き金を引いて飛び込む。それを予期していた理子も応射。

常に防弾服を着込む武偵同士の戦闘において、拳銃は必殺にはならない。近距離で威力を発揮する、いわば打撃武器。

力量は互角。同じ双銃。なら決め手は銃の装弾数だが、それはアリアが不利。

アリアと理子が、まるで演舞のように絡み合う。時折放たれる弾丸も致命傷にはなりえない。だが、アリアにはあって理子に無いものがある。

「キンジ！」

アリアの呼びかけに応じてキンジが飛び出す。懷から抜いたバタフライナイフをアリアが押さえつけた理子に突きつけた。

「終わりだ。理子」

喉元のナイフを一瞥して、理子は一つ呼吸を挟む。

「アリアと理子は色んなところが似てる。家柄、容姿、そして……2つ名！」

理子の長い髪が不自然に揺らいた。キンジがそれに気付くより早く、理子の髪が触手のように動き腰のナイフを掴むと、アリアを切り裂いた。

「アリア！」

「くふ」

続けて至近距離から、理子はアリアに向けて躊躇いなく引き金を引いた。無情な炸裂音。

アリアの小さな体がゆっくり傾き、床に叩きつけられた。

「アリア！！」

激突

気絶したアリアをキンジが抱えて逃走する。しかし此処は飛行機の中。いわば空の監獄。逃げる場所などありはしない。

「勝てる……理子は今日、理子になれる！」

抑えきれない高揚感に哄笑をあげる理子。

今日此处で、アリアを倒し自分はようやく自由を手にする。

「ご機嫌だな」

掛けられた声に振り返ると、バーの一席に酒を瓶ごと呷る赤毛の少年がいた。一体いつからそこにいたのか、理子は気付かなかったが平静を装う。

「見ててくれたんだ。レンレン」

蓮は薄い笑みを貼り付けたまま、再び酒を呷る。

「オルメス。あの子がシャーロック・ホームズの子孫ってのは驚きだ」

ちらりと彼はこちらを見る。

「お前の正体も、な」

「どう思った？」

特に意味はない。好奇心からの質問だった。

「別に。俺はシャーロック・ホームズにも、お前の曾爺さんにも興味はない。

俺が興味があるのはアリアでありキンジであり、お前個人だ」

その返答は、理子には少し予想外の言葉だった。

いままで会ってきた人間は、理由はなんであれ祖先であるリユパン1世を知る過程で理子の存在を知り接触してきた。気に入らない事だが、本心ではそれが仕方ない事だと理子も理解している。

それだけ、自分の祖先が凄い人物だったのかを知っているから。そしてそれはおそらくアリアも同じだろう。

しかし、目の前の少年は偉大な祖先達をどうでもいいと言った。興味がないと。

そんな事を言う人間は初めてだった。

「それにしても、キンジはまだへっぽこのままだな」

無然とした表情をする蓮。理子はゆるみかけた戦闘モードを引き締めて、いつもの不敵な笑みを作ってみせる。

「キー君まだヒスってないからねー」

「ヒスる？」

疑問符を浮かべる蓮に話してやる。キンジが必死になって隠しているヒステリアモードについて。そして、ヒステリアモード時のキンジこそアリアのパートナーたる資格を持つ男だという事を。

「ハハ！　なんだそりゃ」

蓮は腹を抱えて笑う。

「二重人格ってわけでもなさそうだが……。まあこれでやっと匂いの説明もつくってもんだ」

なにやら楽しそうな蓮だが、それを見ながら理子は決意する。そろそろアリア達を追わなくてはいけないが、それよりも先に。

「ねえ蓮」

理子の口調が変わる。それは彼女が本気になっている証だという事を彼も知っている。

理子は知らず唇を震わせて、言葉を放った。

「理子と組んで」

もしかしたらそれは、生まれて初めての『本音』だったかもしれない。

武偵としての理子ではなく。イ・ウーでも、勿論4世でもない。峰　理子。ただの理子として初めての本音で、願い。

「さっきアリアと対峙してたお前は凄く良かった」

蓮は瓶をカウンターに置くとおもむろに立ち上がる。

「嘘のない、本音を曝け出したお前。だが自分で言ったように、お前自身がまだそれを認め切れていない」

無造作に近付いてくると、蓮が理子の耳元に顔を近付けた。その直前に、彼の鼻がクンクンと動く。

「舞台は整った」

この時、理子に確証はなかったが、蓮の言葉がキンジがヒステリアモードに入った事を意味しているのだと直感的に理解した。

「証明してこい。お前自身に対して。お前が理子だって事を」

キュッと、理子は唇を噛む。

やがて悪戯っ子のように無邪気な笑顔を振りまく。いつもと同じにしかしどこか違っていたように、理子自身感じていた。

なにが違うのかまではわからなかったが、不思議と良い気分だった。

再びバーに戻ってきた理子。自慢の長い髪が無造作に切られていた。

「勝ったか？」

彼女の表情を見れば良い結果ではないことなど瞭然であったが、あえて蓮は尋ねる。真意は勿論嫌がらせだ。

理子は口を尖らせて蓮を睨みつけるだけで質問には答えようとはしない。やはり結果はよくなかったらしい。

蓮の横を通り抜け、飛行機のハッチに爆弾を取り付けていく。おそらく逃げる算段だろう。その背に、蓮は再び質問を投げる。

「満足したか？」

「ぜんっぜん！」

今度ははっきりと答えが返ってきた。不満げに眉根を寄せる彼女が、いつもしている演技以上に子供っぽくて可笑しかった。

理子が逃走しようというのに、当然のことながら蓮は引き留めようとしてもしない。理子は蓮の顔を見ないまま、小さく彼の名を呼ぶ。

「ねえ、蓮……。一緒に来て」

それは彼女がさきほどバーを出て行くときと同じセリフ。しかしあの時以上に切実な想いがありありと感じられた。本気でなければ、蓮に言葉が響かないことを彼女はすでに知っているから。

そんな理子の気持ちを全て察したうえで蓮は薄い笑みを浮かべて答える。

「断る」

「うそつき」理子は頬を膨らませた。

「アリアの情報あげる代わりに、理子のお願いひとつきいてくれる約束したのに」

「有効期限はないが、保障もしないって言っただろ」

「ケチ」

「まあお前も頑張ったからな。次会った時また、お願いってのきいてやるよ」

「どーせまた保障してくれないんでしょう」

無言の笑みは肯定だった。

「理子！」

ちょうどいいタイミングでキンジが到着する。いる筈のない蓮の存在に驚きは隠せなかったが、理子が逃走の準備をしている事に気付くと、意識を彼女に注ぐ。的確な判断だ。

「「え？」」

2人の隙について、蓮が爆弾など意にも介さず理子に接近する。そのまま、爆弾が取り付けられたハッチごとなんと蹴り破った。即座にキンジが理子に銃を向けるが、蓮が邪魔で狙えない。

「これはサービスだ」

理子にだけ聞こえる声量で言うと、理子を機外へ放り出した。理子は自前の改造制服をパラシュートに変形させ、結果悠々と逃走を成功させる。

脱出の直前、理子もまた蓮にのみ聞こえる声で言った。

『理子、諦めないから』

最後の最後、彼女らしい不敵な笑みを取り戻す。雲の海に消えていく彼女を見送る蓮。

「どういづつもりなんだ？ 蓮」

カチャリと音がたつ。蓮が振り返ると、険しい表情でキンジが銃をこちらに向けていた。

先ほどの一連の流れ、一見蓮が理子を追いつめ結果取り逃がしたように見えるが、見様によつてはわざと逃がしたようにも見える。少なくとも今のキンジにはそう見えた。

それ以前に、蓮がなぜ此処にいるのか。いやそんなことより、蓮が今まで何をしていたのか。なぜ何もしなかったのか、という方が重要だった。

「お前は理子の仲間か？」

「……………」

「イ・ウーのメンバーなのか？」

「だったらどうする？」

不敵に笑う蓮。

「もしそうなら、俺は武偵としてお前を捕まえる」

意思表示するように、キンジはトリガーに指をかけた。

「ヒステリアモードか」

「……理子に聞いたのか」

能力が露見してもキンジは冷静だった。

蓮は笑みが抑えきれない。目の前の人物はまるで別人だ。以前のバスジャックの時のような腑抜けた空気が微塵も感じられない。構えひとつとっても、隙がない。

「どうなんだ、答えてくれ」

「なあ、キンジ……」

キンジの質問には一切答えず、蓮は身勝手に口を開く。銃の脅威も疑惑も敵意も、何もかもを呑み込んで、蓮は 笑った。

「殺し合うか？」

「……っ」

キンジだったからこそ、ヒステリアモードのキンジだったからこそ

引き金を引かなかった。もし引いていれば、蓮は容赦なくこの僅かな間合いを潰し、躊躇いなくその力を解放していた。そのあまりにも危険な結果をキンジは回避した。

たまらない沈黙。キンジには永遠にすら感じられる沈黙。やがて堪えきれないというように、蓮が破顔した。

「うそ」

クツクツ笑う蓮。今までのプレッシャーがまるで夢だったかのように消え去るが、キンジは笑えなかった。

（嘘……？）

一体どこからどこまで？ 何が嘘だったのか。

ヒステリアモードの自分が、何もわからなかった。しかし、ひとつだけ確かなことがある。あの時、あの押しつぶされそうなプレッシャーだけは嘘じゃない。真実だったと。

まだ冷たい汗が止まらなかった。

「ぼんやりしてていいのか？」

脈絡もない言葉にキンジが首を傾げる。蓮が顎で外を示すと、キンジもそれを発見し目を見開く。

「ミサイル！？」

爆音と共に機内が揺れた。

二度目の光景

ひとまずコックピットへと戻る蓮とキンジ。操縦席には似合うはずもない少女が座っていた。アリアだ。

「遅いわよキンジ……って蓮!？」

「よお」

屈託のない笑顔で応じる蓮。アリアはなぜ蓮が此处にいるのか、とか今すぐにも色々と問いただしてやりたかったが、何より操縦で手いっぱいだった。でかけた言葉を呑み込み、操縦に専念する。

「理子は？」

「逃げられた」

もう片方の操縦席に座りながらキンジが答える。

「それにミサイルでエンジン4基の内、2基破壊された」

その事実には驚きを隠せないアリア。エンジンを破壊されてもいますぐ墜落するわけではないが、ここまでの大型旅客機の運転経験はアリアにはない。そしておそらくキンジにも。

「それだけじゃないな」

クンクンと鼻を動かす蓮。

「多分燃料が漏れてる」

「……まずいな」

燃料計を見るキンジの表情が険しくなる。数値はみるみる減少していた。

「保ってあと10分かな。着陸させるしかないな、お前たちで」

まるで他人事のように愉快そうに笑う蓮に、さすがにアリアが噛みつく。

「あたしたちって……あんた運転できないの!？」

「乗り物は自転車だって乗れないよ」

なんでも超人的な事が出来るくせに肝心なところで使えなかった。歯を鳴らすアリア。不意に、通信が入る。

『こちら航空自衛隊関東方面司令部。聞こえるか?』

自衛隊という言葉にキンジ達が首を傾ぐ。通信の内容は以下の通りだった。

『羽田、成田滑走路は現在トラブルにより使用不能。その為我々が君たちを太平洋上にて安全確実に着陸出来るよう誘導する。繰り返す』

「……は従いましょう」

そういつて操縦桿を指示通り傾けるエリア。その手が別の手で止められる。

「キンジ？」

「海の上で安全確実に着陸出来る場所なんてない」

キンジの言葉にエリアが息を呑む。

『よく覚えてたな、キンジ！』

「武藤か？」

通信に割り込んで来たのは、キンジ達と同じ武偵高の人間。キンジ達のクラスメートの声だった。

『政府はとくにお前らの事を見捨ててる！ 着陸失敗のリスクの方が怖えってな！』

『何を言っている！？ 勝手な事を』

『うるせえ！ 武偵は武偵を見捨てねえ！ オレ達は一般市民だけじゃなく、キンジ達も助けてえんだよ！！』

通信機越しから聞こえる仲間の声が、キンジ達にはこれ以上なく心強かった。

『クッ……我々に従え！ 従わなければ、撃墜の許可も出ている！』

切羽詰って本音を出した男。誘導の為、と言っていた戦闘機も本来の役目はこの機の撃墜なのだろう。素人同然のパイロット以前に、これはただの旅客機。勝負になる筈もない。どうする？ キンジとアリアが考えを巡らす。黙っていても、やがて燃料が尽きて墜落する。

「キンジ、それを貸しな」

「蓮？」

差し出された手。見上げれば、こんな状況でも笑みを絶やさない男の顔があった。

キンジは一瞬だが逡巡する。まだ蓮への疑惑は解けていなかったからだ。しかしだからと言って何が出来るわけでもなし、要求通り通信機を手渡す。

ヘッドフォン型のそれを手で持って、蓮は口元に近付ける。

「あーあー、聞こえてる？」

『なんだ貴様は』

こんな状況下で緊張感に足りない声に、自衛隊の男が怒りを押し込めた声で応える。

蓮は笑った。向こうには見えないであろうから、喋り方で伝わるようにうたつぷりと皮肉げに。

「いますぐあの目障りなハエをどける」

言葉を失ったのは本人以外全員だった。

「それとこの通信もだ。これ以上余計な茶々入れんなよ」

『き、貴様！ 立場をわかっているのか！？』

「そつよ蓮！」

激怒する男と、焦った声を出すアリア。なにせ今、自分たちの命を握っているのは通信機の向こうにいる自衛隊なのだ。挑発して得なことなど何一つない。それなのに、赤毛の少年は辞めない。

「二度言うのは嫌いだが、もう一度だけ言ってやる。消えろ」

『……どうやら死の直前で気が狂っているらしいな。そんな人間がいるのではこれ以上飛行させることも出来ない』

口調は冷静に戻ったが男の声から怒気が消えない。これを理由に撃墜命令を出すつもりなのは明らかだった。

「死ぬ……俺がか？」

男の言葉にきよとした表情をする蓮。そして、囁くように小さく喉奥で笑い声を噛み殺し、しかし堪えきれなくなったように堂々と高笑いし始めた。男だけではない、キンジ達も本当に蓮の気が狂ってしまったのかと思った。

『どうやら本当に狂っているようだな。よし、パイロットに撃墜命令を』

「志々島 蓮」

音が、死んだ。不自然な静寂に半ば死を覚悟していたキンジ達が不審に思う。やがて長い沈黙を挟み自衛隊の男が声を出す。

『……貴様今、何と言った？』

男の声が若干震えているようにキンジとアリアには聞こえた。

「二度言うのは嫌いだって言っただろ？ 今の言葉で理解出来ないほどにお前が下っ端ならもっと上に伝える」

なぜだろうか、キンジにはわからなかった。だが蓮が名を名乗ったその瞬間から、彼と男の立場が逆転してしまったように感じられた。

「ああ、それと……俺は仮にこれを墜とされても死なない。俺が俺の世界で死ぬことはありえない。だからお前がもし構わず撃墜するなら好きにしてくれ。そうしたら」

アリアが怯えた。キンジも、冷や汗が止まらなかった。

「そこからすぐに逃げるんだな。俺はお前を地の果てだろうと追いつめて、必ず殺してやる」

そうして蓮の方が通信を切った。そのすぐ後、自衛隊の戦闘機が何もせず去っていく。そして遮断した通信機から二度と男の声が届く事もなかった。

「あんた一体……」

アリアの問いに、しかし蓮が答える事はなかった。

「そんな事より見るよ」

蓮に促されて二人が下方を見ると、真つ暗闇のなか学園島の一か所だけがおびただしい光の道を作っている。仲間の光が、キンジ達を導く。

そう死ぬはずがない。操縦に専念する二人を背後から眺めながら、蓮は行く末を確認する必要すらないとばかりに機内に戻る。なぜならまだ、彼らには『死』の匂いは感じられない。

とあるビルの屋上で寝転がる赤毛の少年。見上げる空は、昨日の出来事が夢だったかのように青く澄み切っている。

ガチャリと扉が開けられる。やってきたのはショートヘアの少女。身の丈に合わない長銃を背負う彼女を、蓮は一度だけ見た覚えがあった。

「レキ、だつたっけ？」

こくりと頷くレキ。感情を読み取らせない無表情で、彼女は蓮を見る。

「蓮さんは、行かないのですか？」

『なにが』とは蓮は問わない。しかしその質問に答える事もない。無視されたようなものだが、レキは特に気にした様子もなく淡々と続ける。

「アリアさんは今日帰ります」

蓮に驚きは、やはりなかった。

「キンジさんは行かれました」

まるで事務的な報告をするかのようなレキ。かくいう彼女は、そのアリアと共にいる時間はそれなりに長かったが此処にいる。

「この世界ってものは俺のモノだ」

寝転がったまま蓮は語る。レキは傍らに立つたままそれを聞く。

「俺が信じればなんでも出来る。俺が願えばなんでも叶う。だから此処は俺の世界。だから世界は俺を中心に回ってるっていい」

それは幾度となく蓮が言っている呪文のような言葉。しかし別にそれがなにかの呪いであったり、ジnkスのようなものでもない。なんの意味ももたないただの言葉だ。だが、実際世界は彼の思うように回っている。いや、回しているといった方が正しいかもしれない。

「そんな俺だが、別に俺は世界をどうこうしたいわけじゃない。王様になりたいわけでも、魔王にも英雄にも興味はない。むしろ肯定

する。自由を……個人の願いを、思いを、想いを、思想を、判断を、決断を、迷いを、嗜好を、葛藤を、決意を、覚悟を」

結局これもただの言葉だ。言葉遊びにもなっていない無意味な言葉。それでも今の言葉を聞いて、得体のしれない赤毛の少年の一端にレキは触れたような気がした。気のせいかもしれないが。

「だから蓮さんはアリアさんを止めないということですか？」

蓮の言葉を聞く限りそういうことだった。上体だけ起こした蓮は笑って肯定する。

蓮の視線をレキも追う。人並み外れた彼らの目は、この屋上から女子寮の屋上を細かに捉える。ヘリから飛び降りる少女の姿。それを決死の表情で受け止める少年の姿。

「だから俺はアリアを止めるキンジを止めるつもりもない」

空から降ってくる少女。この場所からその光景を見るのは2度目だった。

二度目の光景（後書き）

割と重要報告

ここまで読んでくださってる皆様本当にありがとうございます。まだまだパソコンの扱いには不慣れですが、少しずつ慣れてきたので次話より書き方が大幅に変わります。

読みやすくしよう、と考えた試みですがもしかしたら逆に読みにくくなる可能性も無きにしも非ず。そこはまあ、温かい目をお願いします。

この先もちょうくよく変わるかもしれません。

それと次作として『とある魔術』も書き始めるので、こちらの更新がさらに遅くなると思われます。ちなみに『緋弾』の構想は、アニメ分のストーリー+オリスト一つで完結を考えてます。

以上！ それでは、次話もよろしく願います。

セカンド・ミッション・スタート（前書き）

なかなか此処のストーリーはネタが浮かびませんねえ

セカンド・ミッション・スタート

「だからなんで、お前は此処にいるんだよ」

アリアを連れて帰宅したキンジの第一声である。彼の部屋であるここでは、呑気に寝そべってゲームを堪能する少年がいた。防刃制服を、まるでホストのように大胆に胸元を開いて着る赤毛の少年、志々島 蓮。

「なんでって……酷いなあ。同じルームメイトだろう？」

「誰が！」

キンジの言葉など意に介した様子もなく、蓮はゲームをやる傍らに置いた紙袋に手をつっ込みピンク色の饅頭を取り出しかぶりつく。それに反応したのは勿論アリアだ。

「あー！ー！」

親が夜中にこっそり美味しそうなお菓子を食べているのを見つけた少女のような反応。続いて子猫のような潤んだ瞳を向けてくるのに気付いた蓮は、紙袋をアリアに差し出す。

「食つかい？」

「うん！」

即座に頷いたアリアは紙袋からもまんを掴みとると小さな口いっぱいに頬張る。なんとも至福そうな顔の彼女。蓮と目が合う。彼はニヤリと笑った。

「……っ」

キンジには何も言えなかった。この部屋は間違いなく自分の部屋だが、主導権が自分にあるのかと問われれば首を横に振る。同居（無理やり）しているアリアの権利が圧倒的だった。

ならば彼女に蓮を追い出してもらえばいいのだが、現在彼女は幸福感溢れる様子でもまんを食べている。尻尾でもあればご機嫌に振る勢いだ。つまりはまあ、完全に餌付けされていた。

キンジ自身が強制退去させる手段もあるが、返り討ちは目に見えている。なにせ相手は生身で銃弾の嵐も爆弾も片づける本物の化け物だ。たとえキンジがヒステリアモードにあつたとしても、一人では相手にならないだろう。

「よろしくな」

曇り一つない完璧な笑顔。しかしキンジは覚えている。この顔の裏

にある、ハイジャック事件の時見せたあの殺気を。

「オレはまだ信用してないからな」

キンジと蓮の視線が変わる。

『キンちゃん！』

と、突如玄関の扉の向こうから悲鳴じみた呼び声。次いで決して常識的とはいえない勢いで何度も扉が叩かれる。

『キンちゃん！ キンちゃんいるんでしょ！？』

「呼ばれてるぞ」

蓮が玄関から再びキンジに視線を戻した時、キンジは携帯画面を見つめながらまさに真っ青という顔色で茫然としていた。

『開けるよ、キンちゃん』

一瞬、ホラー映画のワンシーンのように叩かれていた扉から音が消える。しかしすぐに新たな衝撃がやってくる。ただし今度はホラー

映画からアクション映画に変更したようで、扉は鍵を壊されるところか一刀両断された。比喻ではなくまさに一刀両断。

扉を切り捨てた一本の刀。それを振るった人物は扉の前で佇む巫女服姿の少女。黒く長い髪がそんな彼女にはよく似合っていた。ただ今は、その長い髪がカーテンのように少女の顔にかかっていてよく見えない。

「し……白雪………」

「キンちゃん………」

地の底から聞こえる、幽鬼のような声だった。

「噂は本当だったんだね。アリアと同棲してるって」

「いや、違うんだ。これはだな白雪！」

「ううん。キンちゃんは悪くないよ」

「へ？」

文句のつけようのない完璧な笑顔だった。ただし、刀を構えていなければ。

「キンちゃんは騙されてるだけ！　こ・の、泥棒猫がああああ！！」

「んにゃ！？」

扉が叩き壊される事態になっても、ももまんに熱中していたアリアだったが、さすがに殺気混じりに刀を振り下ろされれば無視するわけにもいかなかった。

「天誅ー！！」

「なんなのよー！」

我慢の限界に至ったアリアも自衛の為ガバメントを抜く。部屋の中なんてことお構いなく発砲するアリアと、狂乱のあままに刀を振り回す白雪。その中心で慌てふためくキンジを尻目に、蓮は残ったももまんをくわえていそいそとゲームに向かう。

「賑やかだねえ」

アドシールドとは、年に一度行われる一般の生徒も交えた武偵高の競技会。武偵高ならではの射撃や格闘技術を見せものにしたお祭りのようなもの。普通の学校の文化祭と運動会をごっちゃにした、といえはイメージしやすいかもしれない。

勿論それは今年も行われる。この時期になると競技の代表に選ばれた人間は練習を、そうでない者も受け付けやら役割を決めそれぞれ準備に動き出す。

だが、そんな学校の空気をあざ笑うように校舎の屋上で寝転がる赤毛の少年。当然のように蓮は学校行事のサボっていた。というか、普段の授業すら出ない彼がそんな行事に参加するなんてありえなかった。それでもキンジ達と付き合うようになってからはちよくちよく学校には来ている。来るといっても、屋上で寝ているか、キンジ達が受けたクエストについてくる程度だが。なのでこうしていつも通りこうして風に吹かれて昼寝をしているわけだ。

ガチャリと扉が開かれる音。アドシールドの準備で訪れた生徒かもしれないが、蓮は顔すら向けずやってきた人物の名を呼ぶ。

「レキか」

「蓮さん」

事実、屋上に現れた人物はレキだった。彼女は蓮の存在を認めると、見もせず言い当てられたことに対する驚きもなく一角に腰を下ろす。最初から最後まで物音ひとつ立てない静かな動きだった。見れば見

る程非現実的な綺麗さをもった顔立ちである。元々整ったものであるが、彼女の不思議な雰囲気がそれを際立たせている。

バスジャック以来よく会うな、と思ったがたんにこの屋上でよく会う程度だったと思い直す。

「あんたもサボリ？」

元々興味があつた、という事もあつて蓮は上体を起こすとレキに話しかける。レキは無言のまま首を横に振る。そうして取り出したのは長方形の箱。さらに開けて取り出したのはクッキーにも見える固形物質。カロリーメイトだった。

彼女はそれを水もなく黙々と口にする。

「それ、なに？」

「？ カロリーメイトですが」

「いやそうじゃなくて。それ昼飯？」

何を聞かれているのか理解出来ないように首を傾ぐ。

「栄養面の心配でしたら問題ありません。一日に必要な最低限の栄養素は摂取しています」

「そういうことじゃないんだけどなあ」

どうやら彼女は随分ずれた子らしい、と自分を棚に上げた事を蓮は考えていた。実はこんな会話でも、レキを知る者たちからすればとても珍しい光景だったりする。基本無口無表情無感情、絶対的な狙撃技術のこともありロボットレキと呼ばれる彼女が、こつも普通に会話する姿は誰も知らない。

彼女が喋らないというより、会話する相手が独特な受け答えと間に堪えきれないだけなのだが……。

しかし今会話しているのはあの蓮であり、彼はレキを気に入っている。

「なら今度一緒に飯でも行くか？」

唐突にして大胆な発言だった。勇気と呼んでいいのかよくわからない蓮の行動。常人には耐え難い、筆舌にし難い空気が続く。答えるべきレキがなかなか口を開かないからだ。やがて、少女の引き結ばれた口がゆっくりと開く。

「はい。予定がなければ構いません」

なんと、レキは了承した。あのレキが。彼女を食事に誘って、さらにはOKを貰う。学園の大ニュースにも成り得る出来事が、誰の目もないところで淡々と行われ実現してしまう。惜しむらくは感動す

る人物がこの場に誰もいない事か。

「ん？ 電話……アリアか」

取り出した携帯を耳に当てる。向こうからの要件が主で、蓮は『あ
あ』『うん』と適当な返事をしてしばらくして電話を切った。

「蓮さん」

今日初めてレキの方から蓮に話しかけた。

「何かありましたか？」彼女はやはり淡々と「何やら楽しそうにみ
えます」

「ん？ ああ……」

蓮はいつもの獰猛な笑みを浮かべる。

「楽しいね。すっごく」

この日より、蓮たちの白雪護衛が開始される。

コンタクト

いつもと変わらない朝——とはとても言えなかった。
テーブルを囲む面々。蓮の右隣にアリア。正面にキンジ。そして、

「はい、キンちゃん」

左隣の黒髪の少女。キンジに茶碗を差し出し、日本美人を体現した
ような容姿の彼女の名が星伽ほとぎ白雪しらいな。今回、アリアが請け負った依
頼の依頼主であり護衛対象。

蓮は先日が初対面だったが彼女は希少かつ有能な超能力者であるらしい。よって、武偵高の警備体制が自然と緩くなるアドシアードの期間、彼女の身を守る事が依頼内容。

依頼主、つまりは白雪の要求は二十四時間体制の護衛。というわけで、本日からキンジ宅にて暮らす事になった。ちなみに、彼女とキンジは幼馴染であるらしい。

「ちょっと」

あからさまな不満声は右隣の少女からだった。なにか身悶えている白雪を睨みあげる。

「なんであたしの前には料理がないのかしら？」

「文句があるならボディーガードは解任します」

「この……っ！ 下手にでてれば」

先日の騒動からわかるように、彼女達は仲が悪い。主に理由はキンジにあるように思えるが。

このままでは食卓ごと吹き飛びかねない状況下で、正面のキンジは助けを求めるかのように視線を寄越してきた。

「黙ってないでお前も止めるよ」

「めんどくさい」

一言で切って捨てた蓮は手元の味噌汁を啜る。白雪は料理上手だった。

護衛期間中は登下校も白雪に付きつきり。普段学校に行っていない蓮も、この時ばかりは一緒に行かされた。アリアの命令で。とはいえっても学校内で四六時中、四人一緒にはいられないので、授業中はアリア、放課後はアリアはアドシアードの為の練習があるのでキンジと蓮の二人といった役割分担が決められた。蓮の担当は登下校のみなので、実質四人一緒なのは朝の登校、それとアリアが帰ってきたからの夜ぐらいだった。

護衛一日目が終わり、キンジの部屋に帰ってきたアリアを除く三人居間には現在蓮と白雪の二人。キンジは風呂に入っている。しかし

もとより接点のないこの二人では会話の生まれようがなかった。蓮は適当な漫画を開き、白雪はちらちらと風呂場の方に視線をやりながら、時折顔を赤らめている。

「なんでキンジの事が好きなんだ？」

切り出しは唐突で、しかも漫画に目を落としたままかなりおざなりだった。それでも白雪の反応は面白いほど大きい。顔を真っ赤にして、目を白黒させて飛び退いた。

白雪は少し居心地が悪かった。目の前で漫画を見ている少年。少年というにはかなり大人びた印象の人物だが、自分と同年なら少年で間違いない。

名前は昨日、自己紹介されたのでわかっている。自分の想い人、それと憎き泥棒猫とチームを組んでいて、今回依頼したボディーガードの一人。なんでも噂では、素手で銃器を装備した車を破壊したり、ヘリから飛び降りたりする人らしい。さすがに尾ひれのついたものではあるだろうが、実力はキンジの折り紙つき。それだけで理由としては充分だった。

しかし、会話がない。元々特別人と関わるのが上手な方ではないと白雪自身、自覚がある。しかしこうまで沈黙されるとさすがに辛い。向こうはまったく気にしていないようだ。

早く、早く帰ってきて！ と、心の内で想い人と呼んで気付く。というよりそちらに意識が向いて聞こえてきた。

シャーという水の音。今自分がどこに、誰の部屋にいるのか。そして今彼は何をしているのか。どんな姿で、どんなところを……。途端顔が熱をもった。意識し始めたら止まらない。もはや蓮の事などそっちのけで脳内で展開されるキンジのあんなところやこんなところやそんなところ――

「なんでキンジの事が好きなんだ？」

最初、白雪は誰が喋ったのかわからなかった。妄想に熱中しすぎて、今この空間には自分とキンジ以外にない事になっていたから。ふと我に返って、漫画に目を落としたままの蓮が視界に入る。此处にはいま自分と彼しかいない。なら今の発言は彼のものだ。さて、今彼は何と言ったのか？

『なんでキンジの事が好きなんだ？』

「……………」

思わずソファから飛び退いてしまった。顔が熱い。まるで焼夷兵器を飲み込んでしまったかのように、急激に体の内から熱くなって

いく。爆発寸前とはこの事だった。

「あれ？ 秘密なんかだったか」

ようやく漫画から顔をあげた蓮が首を傾ぐ。白雪ははっとして、おずおずとソファアに座りなおす。顔はまだ赤い。蓮は漫画閉じる。どうやらこの会話に集中するらしい。

「秘密だった？」

再び尋ねられて、白雪は無言で、首を横に振る。実際、秘密にしているつもりはない。自分なりにかなりアピールしているつもりだ。それでもまだ直接告白したわけでも、キスをしたわけでもないが。ふと頭の中にあの泥棒猫の顔が浮かんた。彼とキスをしたとか何とか。消去。記憶から消去。

「アリアナンテオンナ、シラナイ」

「？」

ぼそりと言ったので蓮には聞こえなかったようだ。

「それで、なんでキンジの事が好きなんだ？」

蓮は再び尋ねてきた。

「あいつが面白いつてのは認めるが、別にキンジじゃなくてもいい
だろ？」

「嫌！」

思ったより大きな声が出てしまった。正面で蓮も目を丸くしている。

「あう……、う、ごめんなさい」

「謝らなくていいさ」そういつて蓮は笑う。「で、なんでキンジじ
やなきや駄目なの？」

「……キンちゃんじゃなきや嫌なんじゃなくて、キンちゃんだから
良いの」

自然と顔の筋肉がゆるんでいく。

「キンちゃんだけだったから……」

幼い頃から、星伽の神社から一步も出る事が許されなかった。過保

護を通り越して閉鎖的なあそこで、自分と同年代の友達なんて一人もいなかった。

しかし、そんなところでも毎日遊びに来てくれる子がいた。それがキンジだ。

一度、彼はそんな自分を神社から連れ出してくれた。手をひいて連れ出してくれた。あの日見た花火は今でも昨日のように思い出せる。白雪の中で色褪せる事は無い。

勿論、帰ってから二人ともこってり怒られた。それでも、キンジは遊びに来てくれた。次の日も。その次の日も。

白雪は自分の手を胸に抱きしめる。

「キンちゃんは優しくて、強くて、かつこ良くて……」

嬉しかった。心が安らいだ。

「キンちゃん以上の男の子なんて私は知らない」

「そっか」

口にして改めて白雪はキンジの事が好きになった。同時に不安にもなる。

アリアはとても魅力的だ。自分なんてまるで敵わない。だからキンジが彼女を意識してしまうのも仕方がない。それでも、渡したくない。彼だけは渡したくない。負けたくない。

すると突然携帯が震えだした。電話だ。

「もしもし？」

『白雪、俺だ！』

「キンちゃん！？」

切迫した声で彼は叫ぶ。

『助けてくれ！』

白雪は携帯をその場に放り捨て駆け出す。キンジのもとへ。

電話に出るなりソファをひっくり返して駆け去っていく白雪。その背を見送って、蓮の視線は置いてかれた彼女の携帯に向く。電話はまだ繋がっていた。蓮は携帯を掴み、耳元にやる。

「あんたがデュランダルか？」

今回の白雪の護衛、そもそも狙う者がいなければ護衛などという仕事は成立しない。

デュランダル。

超能力を扱う武偵、つまり超偵を狙う誘拐魔。その存在自体がおぼろげで、実在するかもはっきりしていない犯罪者である。ちなみに今回アリアがこの依頼を受けたのも、デュランダルが彼女の母親に罪をきせた一人なのでそれを捕まえようというつもりだ。

まあ、そちらに関して蓮は関係ない。

『……………』

電話の相手は無言。蓮はその人並み外れた聴力で先ほどの会話を聞いている。が、まさか本当に相手がキンジではないだろう。なら、そんな悪戯をするのは一人だけ。

「無視しているのか、それとももう聞いていないのか……。ま、どっちでもいいさ」

電話の向こうにいるであろう者に蓮は笑いかける。それはまるで旧

友との会話を楽しむように自然に。

「せいぜい楽しませてくれよ」

ブチツ、と通話が切られる。断続的な音を聞きながら、蓮は笑う。切った、という事は今の蓮の言葉を向こうは聞いていたという事だ。今の挑発に、はたしてどう応えてくれるのか。今から楽しみで仕方がない。

「バカキンジー!!」

「やめろアリア！」

どうやら帰宅したらしいアリアの怒声。次いで銃声。居間に飛び込んできたのはパンツ一丁姿のキンジ。それを追うように銃弾が飛び交う。扉の向こうでは衣服が乱れ、茫然とした白雪も見える。

——蓮は別にデュランダルが楽しみなわけではなかった。理子の時と同じ。

デュランダルのアクションに、彼らがどんなリアクションをするのか。それが楽しみなのだ。

白雪の携帯をテーブルの上に戻し、蓮は再び漫画を手取る。キンジが海に飛び込む音が聞こえた。勿論、次の日キンジは風邪をひいた。

暗闇の扉

キンジの風邪も治り、白雪の護衛も数日が経過した。アドシアードも目前に迫っているが、依然としてデユランダルからの襲撃はない。依頼の都合上ここ最近早起きを強いられている蓮が欠伸混じりに廊下を歩いていると、角から誰かが飛び出してきた。

「おっと」

「きゃっ！」

相手の方が飛び出してきたわけだが、ぶつかられた蓮は微動だにせず、むしろ相手の方が悲鳴をあげて倒れてしまう。その手を蓮は咄嗟に掴む。

「大丈夫か……って、アリアか」

転倒を免れて蓮の手に掴まれていたのは見知ったピンクツインテールの少女だった。彼女の格好はいつもの制服ではなく、極端に丈の短いスカートにノースリーブのトップ。全体的に黒色を基調にした、武偵高のチアの服装だった。

そういえば、アリアはアドシアードにはチアで参加するとか言っていたつけ、と思ひ出す。思ひ出しながら、手にぶら下がっている状態の彼女に言ってる。

「パンツ見えてるぞ?」

「にやつ!?!」

もとより見えそうな格好ではあったが、倒れかけた拍子にスカートが捲れてしまったらしい。ばひゅん!

と物凄いスピードで後ずさりスカート直したアリアは、顔を真っ赤にしてプルプルと体を震わせる。いつもならここで『風穴!』的な発言と共に銃をぶっ放す所だが、なぜだか今日は違った。顔を伏せたまま、動きが止まっている。

「アリア、泣いてるのか?」

少女はビクンと体をはね上げた。しかし、頷くでも否定するでもなく、出てきたのは質問だった。

「蓮、あんたもデュランダルはいないと思う? 証拠も何も無いあたしの言葉は信じられない?」

蓮にはその言葉が『信じて欲しい』と言ってるように聞こえた。震える声には、縋るような必死さも見えた。

アリアの質問に答えてやることは簡単だった。なぜなら蓮は先日、デュランダルらしき人物から白雪の携帯に電話がかかってきたことを知っている。デュランダルは存在する。そう言っただけでやることは容

易い。しかし、今彼女が問うているのは、本当はそんな事ではない事も蓮は気付いている。

蓮はため息を一つ。

「どっちでもいい」

呆れの色さえみせて、答えた。案の定、アリアは鋭く睨みつけてきた。

「どっちでもいいって……どういう意味よ？」

「そのまんまの意味だよ」蓮は後頭部を掻きながら「居ても居なくても、どっちでも俺には構わない。まあ、希望としたら居て欲しいけどね」

犯罪者にいて欲しいなどと、武偵云々以前に不謹慎極まりない言葉だが、蓮は冗談ではなく本音で答えた。彼女もそれは『直感』で感じたのだろ。だからむっとした表情だが、馬鹿にするなど怒り出しはしなかった。

「蓮。あんた結局何が目的なの？ あたしやキンジとチームを組もうって言い出した理由……ううん。そもそもあんたは、武偵に対して執着がない。かといってあんたは燃えるような正義感も、功名心もお金も求めてない」

さっきまで泣きそうだったただの少女の姿はもうなかった。真っ直ぐな、眩むほど真っ直ぐな瞳が蓮を射抜く。
その姿に蓮は、さぞ愉快そうに口の端を歪めた。そんな彼女だから一緒にいるのだ。

「楽しそうだから」

「？」

当然理解できるはずもなくアリアは首を傾げた。しかし蓮はそれ以上の説明はないというように背を向けてしまう。

「ちょっと！」

「信じるよ」片手を上げながら「仲間の言葉は信じる」

それきりアリアから呼び止められる事はなかった。

アリアと別れてすぐ、携帯に着信。相手はキンジだった。

『もしもし、蓮か？』

「どうした？ デュランダルでも現れたのか」

軽口のもりだったが、キンジは電話の向こうで苦い顔をしているようだった。どうやら先ほどのアリアの様子と関係があるらしい。彼は蓮の言葉を振り払うように要件を口にする。

『アドシールド終了まで護衛はオレ一人でやる』

「へえ。なんで？」

キンジは一瞬間を空けて、

『……デュランダルなんて居もしない敵相手に、三人も護衛なんて馬鹿げてるだろ？』

蓮は間を空けず、

「そうか。わかった」

それじゃ、とどこか気が重そうなキンジの声を最後に通話が切られる。

使い終えた携帯を閉じて懷にしまう。蓮の表情から、いつもの微笑は消えていた。色の失せたその瞳は、まるで何日も前から期待して

いた花火大会が、いざ見てみると大したことがなかったような、そんな不満そうな顔。

「これがお前の策か？」

誰もいない廊下で一人呟く。絶対零度を思わせる冷え切った声で、虚空を見上げる。

「そうだってなら……………」

—— つまんねえな。

赤毛の少年はぼやく。

白雪は一人だった。アドシールドが開催されている学園の中心から離れた、兵站学部専用格納庫に彼女はいた。生徒会の仕事も放つて、勿論アドシールドを楽しむためでもなく。

格好も制服ではなく、いつも着ている巫女装束。そして腰にさげた

一振りの刀。

いま周りにはアリアも蓮もない。そしてキンジも、いない。誰もいない。

彼女は手にしていた携帯に文字を打ち込む。何度も文章を考えた。何度も書き直した。結局、出来上がった文章は自分でもうんざりするほど短いものになってしまった。

『キンちゃん、ごめんね』

もつと言葉はあつた。直接声を聞きたかった。——あの時、離れていくあの人の背を呼び止めたかった。白雪は溢れだしそうになる感情をなんとか抑え込み、送信ボタンを押す。メールは送信された。

（キンちゃん、怒るかな？）

自分で考えておいて、それは即座に自分によって否定される。きっと彼は怒らない。きっとあの人は心配してくれる。だからこそ、そんな彼だったからこそ、彼女は此処に一人でやってきたのだ。

白雪は扉を開く。二度と戻れないかもしれない暗闇へ。彼のいる光の世界に背を向けて。

星伽の巫女

アドシールド当日、代表選手でも何かしらの仕事を請け持っているわけでもない。白雪の護衛の任からも解放された蓮は、いつものビルの屋上にやって来る。アドシールドというお祭りのなかこんな場所に来る物好きはそういない。しかし屋上には先客がいた。

「レキ」

小柄な体格に似合わない長大な銃を背負った少女は、相変わらず変化の見られない顔をこちらに向ける。

彼女が此処にいる事に驚きはない。なにせ彼女を探して蓮は此処にやってきたのだから。

蓮は左手に持ったそれを彼女に突きだす。特別でもない、ホットドックを。

「一緒に食べようぜ」

レキは一度差し出されたそれを見て、再び蓮に視線を向ける。

「なぜですか？」

「ん？ この前、今度一緒に飯食おうって約束しただろ？」

戸惑っているように、見えた。実際どうだったかわからない。

『ほれ』とすすめてくるホットドックをレキはまじまじと見つめて、ようやく手に取った。

手にしてからもしばらく睨めっこしていたが、やがて小さな口で囁り付いた。

それを確認してから、蓮も自分の分を豪快に齧った。アドシールド中の出店で買った普通のものだったが予想よりずっと美味しい。旨いとも不味いとも言わないが、黙々と食べているようだからレキにも気に入ってもらえたようだ。

無言の食事風景だが、尾心地の悪さはなかった。蓮が先に食べ終わり、レキが食べ終えてからも会話はなかった。屋上に吹き抜ける風だけが二人を撫ぜる。

「ありがとうございました」

風に乗って言葉が届く。ともすれば聞き逃してしまいそうな声の大きさだったが、蓮は事もなく聞き取った。

「旨かったか？」

「……はい」

こくんと頷く。

「そりゃよかった」

再び会話が途切れる。しかしやはり、居心地の悪さは無かった。

「動きがありました」

屋上で見張っていたレキが言う。寝転がったまま、蓮が鼻をきかせる。

「白雪か……あつちは倉庫の方が」さらに感覚を研ぎ澄ます。「キンジは近くにいないみたいだな」

つまり、これは敵の——デュランダルの方策通りというわけだ。アリアは離れ、キンジも離れ、白雪を一人おびき寄せる。おまけに今はアドシアードの真っ最中。白雪の不在が知れるのは早くてもアドシアード終了後。誘拐だとわかるのはさらに後だろう。タイミングもシチュエーションもばっちりだ。

着信。

「もしもし」

『蓮か！？』

予想通り切羽詰った声でかけてきたのはキンジだった。
走っているのか息が荒い。大方白雪の失踪に気付いたのだろう。

『白雪がいなくなった！』

「どうして？」

『……多分、デュランダルだ』

「デュランダルは存在しないんじゃないかなかったのか？」

意地の悪い蓮の言葉に、キンジは奥歯を鳴らした。自らを責めるように、きつく歯を食いしばる。

『そうだ……全部オレのせいだ。白雪はオレに守ってくれと言った。アリアだって、あんなに白雪の危険を訴えていたのに！！』

オレがもっとアリアの言葉を信じていれば！ 白雪から目を離さなかったら！ あいつを守れ——』

「うるせえ」

鼓膜を破る轟音。レキの銃弾がキンジの足元を撃ったのだ。

「つまんねえよ、キンジ」

電話の向こうでキンジが息を呑む。

「俺はそういう」『もしもの話』ってのが大嫌いなんだよ。虫唾が走る。

この世界にあるのは現実だけだ。くだらない事も、気に入らない事も、過ぎれば全部現実なんだよ。それをあとからギヤーギヤー喚くほどつまらない事はないんだぜ？」

『……………』

キンジが大きく息をつく。

『蓮、なにか白雪の目撃情報はないか？』

返ってきた声は先ほどの狼狽えっぷりが嘘のように覚悟に満ちていた。いや、ただ追いつめられて我武者羅になっているだけなのか。どちらにしても、今のキンジの方が百倍楽しいと蓮は思う。

「調子が出てきたな。——十二分前、兵站学部専用格納庫付近で確認されてる。怪しいのは第三備品倉庫ってところか」

『わかった。行ってみる！』

それ以上なく電話が切られる。断続的な音を吐き出す電話を見つめて蓮は苦笑する。

「慌ただしい奴」

切られた携帯を懷にしまふ。

「レキ」

「はい」

「今の会話、アリアに伝えといてくれ」

「はい。蓮さんはどうするのですか？」

「さて」

蓮は笑う。

このままキンジを追うか。アリアと合流するか。今回も傍観に徹す

るか。

「どうしようかね」

デュランダル。

超偵ばかりを狙う連続誘拐魔でありながら、誰もその姿を見た事がない事から実在しないのではとまでいわれた幻の犯罪者。しかしその姿が今、アリア達の前に露わになる。

白雪に扮していたデュランダルだったが、本物の白雪によってそれも暴かれる。

長い銀髪を二つの三つ編みにして結った甲冑姿の美少女。デュランダル——いや、彼女の本当の名前は、

「三十代目ジャンヌ・ダルク」

史実では十代半ばでジャンヌ・ダルクは命を落としたが、彼女の言葉によるとそれは影武者。今なお続くジャンヌは、今は理子と同じ

イ・ウーに所属していた。そして白雪のような目ばしい逸材をさらに続けてきた。

「けどそれも今日で終わりよ！」

アリアが高らかに宣言する。こちらは三人。それもキンジは既にあのスーパモードに入っている。取り逃がしはしない。

「ふん、話しに聞いた通りの威勢の良さだな。だがそう簡単にいくか？」

ジャンヌが手にしていた剣を振ると水浸しだった床、壁、天井までもが凍りつく。彼女もまた氷使いのステルスだった。

「手はまだ痛むだろう、アリア？」

「……っ」

その通りだった。先ほど彼女の一撃でアリアの手は凍傷のような呪いを受けていた。同じステルスである白雪の力で治癒してもらったものの、まだ全快には程遠い。

「バラバラに動けば、私は真っ先にお前を始末するぞ」

これでこちらの動きが制限されてしまった。こうなればキングが白雪、どちらかがアリアのフォローに動かなくてはならない。一瞬で数の有利が潰される。おまけに水に囲まれたこの場所は氷を操る彼女が圧倒的に有利だ。一対一では勝ち目がない。

さすが、策士の一族と名乗るだけある。

「……私が戦う」

白雪が一步前に出る。

「正気か？ 星伽の巫女。原石に過ぎないお前が、イ・ウーで研磨された私に勝てると思っているのか？」

ジャンヌはつまらなそうに笑って、

「それにお前は星伽を絶対に裏切れない」

「そんなことない」

ジャンヌの言葉を白雪はあっさり否定した。

「普段の私ならそうかもしれない。でも、今なら……」決意に満ちていた白雪は一瞬気遣うような顔を見せ「ジャンヌ、もうやめよう？」

「なに？」

「私はもう誰も傷つけない。たとえ貴方であっても！」

「笑わせるな」

問答は無用。そう言うようにジャンヌは剣を構える。

その気迫を感じ取った白雪も再び覚悟を決める。ただ今一度、もう一度だけ背後の少年に言葉を放って。

「キンちゃん、私を見ないでね」

「安心しろ白雪。オレがお前を嫌いになる事は、なにがあってもあり得ない！」

白雪は一瞬呆けた顔をして、目の端にためた涙を喜びに変える。

「すぐ戻ってくるからね」

再びジャンヌに対した彼女には、もう涙すらなかった。そうして戒

めを解く。

普段身に着けて離さない封じ布のリボン。途端、身の内から凄まじい力が溢れるのを感じる。

「ジャンヌ、もう貴方を見逃す事は出来なくなった」

掲げた刀に突如として炎が躍る。その熱は彼女の近くの氷を一瞬で溶かす。

「白雪って名前は真の名前を隠す伏せ名。私の本当の名前は――」

その力は、代々受け継がれてきた。二千年。その果てしない時を超えて。

「緋色の巫女……緋巫女!!」

氷の聖女

ステルス同士の戦い。炎と氷が舞う光景は、まるでこの世のものとは思えない。美しくもある幻想的なそれは、しかしただの人の領域を超えた凄まじい戦い。

だからといってただ見ているけなんて出来る筈無かった。

「キンジ、あたしはもう大丈夫。白雪に加勢するわよ」

キンジも頷く。

彼女たちの攻撃はその全てが必殺。故にそれに比例してエネルギーの消費量は多く、短期決戦。そこにこそ勝機がある。

ジャンヌがガス欠を起こした時、彼女はたんなる人に戻る。

「きゃっ！」

ジャンヌの一撃に白雪が吹き飛ばされる。

「終わりだ白雪！」

「いま！」

ジャンヌが剣を振り上げた瞬間を狙ってアリアが合図を出す。キン

ジ、アリアがそれぞれ駆けた。

「ただの武偵如きが！」

それに気付いたジャンヌは白雪への攻撃を中断し、二人に向けて剣を振り下ろす。冷気の斬撃がアリアを襲うが、アリアは制服を盾に冷気をやり過ごす。アリアはさらに接近。

二刀を操りジャンヌに強襲。交差気味に振ったそこに、しかし魔女の姿はなかった。

頭上。アリアを飛び越えて、ジャンヌの狙いは後方のキンジだった。キンジの銃撃を躲しジャンヌの一刀がキンジを襲う。

それをキンジは銃を捨てて、ジャンヌの魔剣を両の手で挟んだ。いわゆる白刃取り。

カチャリ、とジャンヌの後頭部にアリアが銃を突きつける。

「これで終わりよ、デュランダル」

「まだだ」

剣を抑えられ、銃を突きつけられてなおジャンヌに観念した様子はない。

「私を殺す事のできない貴様等に、私は捕えられない！」

途端ジャンヌの剣が凍りついていく。このままではキンジの手まで凍りつく。手を放せば、自由になったジャンヌはアリアに斬りかかるだろう。

「ジャンヌ！」

しかし体勢を戻した白雪が駆け付ける。おそらく最後の力を振り絞った渾身の力。白雪の刀を猛々しい火炎が纏う。白雪の狙いはジャンヌ本人ではない。狙いは剣。剣さえ破壊してしまえば、さすがの彼女も諦めるしかない筈だ。

「はああああ！！！」

下段構えからの切り上げ。炎の斬撃は天を切り裂くようにその途中の聖剣さえも叩き折る。——筈だった。

「甘い！！！」

ジャンヌは今一度己の周囲に氷風を起こす。キンジとアリア、二人は堪らず後退。自由になったジャンヌはなりふり構わず転がって白雪の最後の一撃を回避した。

「白雪！！」

「動くな！」

再びキンジが目を開けた時には、力を使い果たしぐったりと座り込んだ白雪に、ジャンヌが剣を突きつけていた。形勢は一発で逆転した。

「ふん」ジャンヌは勝ち誇るように笑い「動くなよ。動けば白雪の命は無い」

たった一言でアリア達の動きは止められる。

「誰も傷つけないなどと……、そんな甘い事など言わずに躊躇わず私の体を狙っていれば躲す事も出来なかったものを」

もはや喋る事も出来ない白雪を見下ろして、ジャンヌは剣を振り上げる。

「今一度問おう。白雪、私と共に来るつもりはないか？」

「……」視点が定まらない瞳でジャンヌを見上げ、一度だけ首を横に振った「私は………武偵、だから」

「そうか」つまらなそうに、ジャンヌは言う「ならば死ね」

「白雪！」

アリアが、

「白雪イイイイー！！」

キンジが絶叫する。しかし刃は止まらない。もう、止められない。

「――終了だ」

ピタリと、剣は白雪の首寸前で止まる。

声。ついで足音。

カッン、カッンと無遠慮な足音が闇から響く。この場の誰もがその音に耳を澄ませ、そちらを凝視する。

足跡の主は特に隠れるわけでもなく、もったいぶるわけでもなく、あっさりとその身を晒した。拍子抜けするほどあっさりと、しかし絶対な存在感をもって、赤毛の少年は不敵な笑みを貼り付けて現れた。

何故、自分は手を止めてしまったのか。

ジャンヌは何度自分に問うても答えが出なかった。

足音。この状況でなんとも大胆に響く足音。

この状況、やってくるなら敵の増援であろうと予測出来る。ならば姿を隠し、背後から自分を襲った方が確実に有利になるというのに、この足音の主はそもそも『隠れる』という考え方が存在しないというように音をたてて、結局堂々と現れた。

赤毛の少年。アリア達と同じ制服を、まるでホストのように胸元を開いて着ている。

ジャンヌは彼を知っている。名前は確か志々島 蓮。彼もまた白雪を護衛する一人だった。

しかし、彼女の策略により護衛を解任された。アリア達と共にこの場に現れなかった時点で、この男は障害から排除していたのだが、彼は今此処にいる。

アリア達同様策に気付かれたのか。だとしたら何故、このタイミングで現れる。

「なんで今更やってきたのか不思議か？」

「……っ」

動揺を見抜かれたのか、とジャンヌは心を鎮め表情を凍らせる。
心理戦は策士の一族と呼ばれた自分の土俵。なのにこの男の前では
まるで思考が働かない。

「簡単だ。言っただろ？ 精々楽しませてくれって」

そう、だった。

この少年にだけは策は見抜かれていたのだった。しかしこの少年は
ジャンヌの仕掛けた罠に気付いていながら仲間になんてそれを伝えようと
はしなかった。だからこそ彼女は蓮を放置したのだ。

なら、今まで彼は見ていた言っのか。仲間が戦い、仲間が傷ついて
いるのをただ見ていたのか。

それなのに、今姿を見せる。その理由は。

「なるほど」ジャンヌは氷の微笑を取り戻し「高みの見物を決めて
いたが、いざ仲間が危険になり慌てて姿を現したのか」

それならつじつまが合う。わざと声を出して現したのも、こうして
自分の手を止めさせる為。

わかってしまえば簡単だった。得体の知れないこの少年も、結局は
仲間を救うと叫ぶ白雪達と一緒。

そうだ。同じだ。それなら――、

（恐………る必要はない………？）

絶句した。その事実には。

恐れていた。自分はこの少年を恐………れていた。

一つ気付いてしまえば簡単だった。

なぜ自分は剣を振る手を止めたのか。いやそもそも、なぜ自分は明確に障害となりうるこの少年をわざわざ放置などという愚行を犯していたのか。

剣を握む手が震えていた。掌に、じわりと汗が滲んでいた。

「ステルス同士の戦いってのもなかなか迫力あったが………」

ジャンヌの喉が干上がる。

身動きのできない白雪を殺す事だって、人質にすることだって出来る。彼よりずっと近い距離にジャンヌはいるのだから。

しかし出来なかった。

いま、一瞬であろうとこの少年から目を離す事など出来はしなかった。

「終わりだな。案外つまんなかった」

背筋が凍りついた。

セカンド・ミッション・エンド

蓮は拳を握って駆け出す。武器も持たない。奇襲でもない。

ただ真っ直ぐ駆けてくるだけの少年に対して、ジャンヌは怯えるように剣を振った。

全力の冷気。最大範囲、最大威力で放った氷の斬撃は蓮を呑み込んだ。

「蓮！」

アリアが悲鳴のように叫ぶ。自身で一度受けたからこそ、あの呪いじみた冷気の恐ろしさを知っている。

蓮は生きていた。しかし、冷気を受ける為に交差させた両の腕が凍りついていた。

「は」ジャンヌは引きつったように口の端を上げ「ははは！　なんだ、口ほどにもないではないか」

蓮は肘の先から凍りついている腕を眺めている。

「無駄だ。その腕はしばらく動くことはない。たとえ白雪がいうと、その氷を即座に完治させる事はできまいが……」

そもそも白雪はジャンヌとの戦いで力を使い果たしている。今すぐ蓮を治療することは出来ない。仮に出来たとしても、ジャンヌが大人身しくそれを見ている筈もないが。

「ふーん」と、蓮。

「どうやら私は貴様を過大評価していたようだ。所詮貴様も私の敵では――」

まるで巨人の足音のような轟音と、ガラスが砕けるような甲高い音が響く。

何事かと驚いたジャンヌは、その光景に絶句する。蓮が凍りついた両腕を、腕ごと床に叩きつけたものだった。

誰もが言葉を失い凝視するなか、赤毛の少年は、叩きつけた衝撃で氷が砕けた両の腕の調子確かめるように手を開閉する。問題ないと確認が取れると、つまらなそうに、

「で？」

「ば、馬鹿な……」

ジャンヌは今度こそ後ずさる。

今までこんな荒業で自分の氷の呪縛から逃れた者はいなかった。腕ごと砕けていたかもしれないのに……。怖くないのか？

いやそれ以前に、たとえ運良く氷が砕けたって、しばらくは凍傷のような痛みで麻痺したように手は動かない筈なのに。

その思考は致命的だった。気付けば、蓮は目の前にいた。

「く……！」

得体の知れない相手。武器を持たない蓮に対して、間合いの外から冷気を浴びせ続ける事こそが最善。

その唯一のアドバンテージが失われる。

ジャンヌは慌てて後退する。しかし蓮はついて来る。

蓮の拳が握られ、ジャンヌに向けて突き出される。ジャンヌはそれを剣で受けてやりすごす。

まるでハンマーで殴られたような衝撃が彼女に伝わった。腕の方も信じられないが本当に問題ないらしい。

続く左の拳による攻撃もなんとか防ぐ。

（この間合いは危険だ！ 距離を取らなければ！！）

身体能力は蓮の方が遙か上。

次の一撃。蓮の攻撃を防いだら、再び最大冷気を放出する。それで倒す事は出来ないだろうが、その隙に距離を開けてしまえば……。いくら蓮といえど、攻撃が届かなければ手の出しようもない筈。

一瞬でこの先の攻防、結末までのヴィジョンをたてたジャンヌは笑みさえ浮かべた。そうして、次にある衝撃を耐える為歯を食いしはる。

「邪魔だな」

その一言で、彼女の策は原型も残さず碎け散る事となる。

蓮は右で拳を作り、アッパー気味に振り抜いた。それを防御し、ジャンヌは冷気の放出と共に蓮の間合いから脱出する予定だった。しかし、蓮の拳を受けた途端、彼女の聖剣は半ばから折れた。

「な——」

今度こそジャンヌの思考が止まる。

ただの人の拳で、彼女の誇る剣は無残に碎ける。そんな冗談にもならない光景を前に、まともな思考など出来る筈なかった。

蓮の手が、握るのではなく指先を揃えて伸ばすように変わる。まるで刃を思わせるそれが、今度はジャンヌの甲冑を貫き腹に突き刺さった。聖剣を折った手だ、今更驚くこともないと、どこか他人事のようにそれを受け入れる。

腹を貫いても勢いをゆるめず、ジャンヌを貫いたまま振り回し壁に押し付ける。

壁すらも蓮の手刀は貫き、ジャンヌはまるで磔のように足のつかない空中に縫いとめられる。

「がふっ……！」

ようやく停止して、ジャンヌの唇から鮮血が零れる。

腹の傷は見るまでもない。砕けた甲冑の隙間から、突き刺さった蓮の腕をつたって血が流れている。

刻一刻と迫る死。力が抜けていく体。

迫りくる死が、しかし彼女にはなんてことは無かった。

そんなものより目の前で笑う少年の方がよほど恐ろしい。自分の死以上に、ジャンヌは彼が恐ろしかった。

「——あ、悪魔め」

一切その笑みに陰りを見せず、一切躊躇いを見せず、蓮は残った左手も刃のように指を揃えると磔となった少女の細い首目掛けて突き出した。

「やりすぎよ蓮！」

「武偵法九条を忘れたのか!？」

左右から、アリアとキンジが蓮に向けて銃を構えていた。

「……………」

長い沈黙の果てに、蓮は左手を戻す。気を失ったジャンヌの首は、皮膚一枚裂けていただけだった。

こうして、デュランダル事件は幕を閉じる。

デュランダル改め、ジャンヌ・ダルク三十世はマスターズ教務科に引き渡された。勿論生きている。腹の傷は致命傷を避けていたし、見た目ほど出血も酷くなかった。

それを知ったアリアは蓮の技に大いに喜んでいたようだった。相変わらずキンジは疑いの目だったが。

アドシールドも無事終わり、そもそも結局今年も行事に一切参加しなかった蓮は何も変わらず屋上で寝転がっていた。

左手を空にかざす。あの時、ジャンヌの首の寸で止まった左手。勿論、蓮はあの時——ジャンヌを殺す気だった。

右手で壁に張り付けた彼女の首を、この左手で貫くつもりだった。一切の躊躇いも、一切の躊躇もなく。

『この世界は俺のモノだ』

いつも、彼が言っている言葉だった。

『——悪魔め』

あの時、ジャンヌが彼に放った言葉だった。

「は——」

かかげた左手で顔を覆う。

「くっだらねえ」

泣いてなどいない。蓮は間違いなく、笑っていた。

雨の日に（前書き）

随分日を空けてしまつてすみませんでした。

なんど考えてもこのブラド編の物語が上手く思いつきません（汗
ラストシーンは出来てるんですが、その間がまったく！
つてなわけで、もしかしたら一番短いお話になってしまうかもしれ
ませんが、どうぞよろしくです。

雨の日に

「と、ゆーわけだから」

腰に手を当てて胸を張るアリア。

蓮はテレビゲームをやりながら、視線すら向けない。一言。

「無い胸張っても悲しいぞ」

「風穴っ！」

容赦なく後頭部目掛けて撃ってきた。蓮はしかし、振り向きもせず首を傾げるだけで躲す。

「なんで男ってそうなの！？ 胸がそんなに大事？ 昨夜だってキンジも理子に……」

ふるふる震えていたアリアはキッとキンジを睨みつける。

「そうよキンジ！ あんただって、理子とあの部屋で何してたのよ？」

突然矛先が変わった事に怯えながら、しかしキンジは必死に反論。

「な……、お前には関係ないだろ？」

「うるさいうるさい！ このピンク武偵！」

ピンクヘアーが何を言うのか。

飽きもせず毎日毎日ギヤーギヤーと、本当に仲が良い二人だった。

疲れたようなため息を吐きながら、ヘッドフォンを装着する蓮。

さて、先ほどアリアの話はなんだったか。思い出した。

次の事件、どうやら自分は仲間外れらしい。

もはやこの学園の指定席となった屋上で惰眠を貪る赤毛の少年。
今日はレキの姿はない。当然か。今頃は皆、テストを受けている筈だ。
蓮に至っては、今更どうでもいい話だが。

「蓮」

だというのに名を呼ばれる。目だけでそちらを見てみると、ピンクツインテールの少女が突っ立っていた。
蓮の鼻が僅かに動く。

そうして、寝転がったままけだるそうに声を返す。

「何か用か？ 理子」

「ぶー。つーまーんーなーい」

一息の間に見慣れた少女の姿が入れ替わる。同じツインテールだが、アリアとは違うふわっとした髪型。同じ小柄な体格だが、彼女達にはそれぞれ決定的な違いがある。特に胸とか。

食べ物で頬張ったりリスのように頬を膨らませる彼女は峰 理子本人で間違いない。元武偵にして、武偵殺しの爆弾魔。いや、今は元武偵殺しの現武偵高生徒なのか。

彼女の正体を考えれば当然こんな場所をウロウロしてれば即逮捕のところなのだが、彼女は政府との取引によって戻ってきた。何を取引にしたかまでは知らないし、興味もない。

昨日、アリア達からその事は聞いている。

「テストはどうしたんだ？」

「チツチツチー、理子ちゃんを甘くみちゃーいけねーよ。バツチリ終わらせて、ついでにキー君とも遊んできたよ」

満たされたような笑顔。ちなみにキー君とはキンジの事。

「なんか用か？」

「相変わらずつれないなあ、レンレンは」ちょこんと隣りにお尻を下ろす。「蓮に会いたくなっちゃったから」

「嘘八割」

正確に、今の彼女の言葉の成分を告げる。

今度こそ、理子は可愛らしさを取っ払ってブスツとした顔になる。

「本当につまらない奴。それが依頼主に対する態度か？」

少女の機嫌が斜めになると、代わって蓮が嬉しそうに笑う。

「別に構わないだろ？俺は今回仲間外れなんだし。依頼主サマ？」

そう、今回の依頼は彼女からのものだった。

なんでも、アリアの母親の無実（とは言っても一部の罪だが）を証言する事を条件に、理子の手伝いをするらしい。確か条件は、

「泥棒、ねえ」

「レンレンも仲間に入れて欲しい？」

「別に」即答して「でも、アリアは承知しないんじゃないのか。いくら証言を得る為とはいえ、泥棒なんて」

「くふ」少女は笑って「盗ってもらうのは理子の宝物。元々理子のものだもん。それに、相手はブラドだし」

「ブラド？」

「無限罪のブラド。イ・ウーのナンバー2。犯罪者相手ならアリア達が捕まる事はないし、おまけにブラドはアリアのママに罪を着せている一人。あいつも捕まえちゃえばさらにアリアのママの刑期も減る。それで、理子のもとに宝物も戻る。

「凄い！これって一石二鳥どころか三鳥？ 理子りんあつたまいー」

「お前にとっては四鳥だろ？」

ピクンと、理子が反応する。構わず続ける。

「アリアにリベンジする機会も出来て、な」

「……ほんと、レンレンって怖いよね」

表情を作る余裕もないのか、理子の笑顔は引きつっていた。
彼女の本当の目的は宝物を取り戻す事でも、ましてやアリアに勝つ
ことでもない。本当の目的はその先。彼女はリユパンという名の鎖
を逃れ、本物の自由を欲している。

自由。そんなもの、はたして本当にこの世界に存在するのだろうか？

「レンレン？」

立ち上がった蓮を不思議そうに見上げる。

「もう中に入ったほうがいいぞ」鼻をクンとさせて「雨だ」

空はいつの間にか厚い雲に覆われていた。

それを見て、ふと思い出す。——否、忘れた事なんてなかった
か。

あの日も、そういえば雨だった。

魔女の音色

キンジとアリアがブラドの屋敷に潜入してから、かれこれ二週間。輪をかけて暇な日常に、欠伸の数が日に日に増えている気がする。

「ん？」

ふと聞こえてくる音色。ピアノの音だ。興味本位でそちらに足を向けてみる。

屋上から躊躇いもなく飛び降りて、目当ての部屋を割り出すと今度は助走もなしに跳びあがり、窓枠を掴む。まるでアクション映画をワイヤー無しで再現している様は、心臓に悪い人が見れば卒倒ものだったろう。

そんな身体能力を持っているのだから当然、窓枠を掴んだ片手で体を引き上げる事など容易な事だった。

幸運にも、鍵は開いていた。

奏者の気が散らないよう配慮して気配を消して中へ。

音色は鮮明になる。

芸術といったものに特別疎い蓮には、この音色がその道にいる者達にとってどう聴こえるのかはわからない。だが、蓮は嫌いではなかった。単純に綺麗だと思った。

「誰だ！？」

中途半端に音色が止まり、弾き手の少女は跳びあがるように椅子から立ち上がる。そうして、足を内側に垂らして窓の縁に座っている蓮を見て、元々雪のように白い顔を青くする。

奏者の正体は、武偵高の制服を着たジャンヌ・ダルクだった。

「志々島 蓮……」

彼女から極大の敵意とほんの僅かな、しかし確実な恐怖が伝わってくる。

つい先日、彼女の腹に穴をあけて、さらには殺そうとしたのは何を隠そう蓮なのだから当然といえは当然の反応だった。

対照的に、蓮の方は敵意どころか戦闘態勢すら取ろうとしない。

「私が此处にいる事に、驚きはないのか？」

間合いを測りながら、問いかけてくるジャンヌ。

「別にそんなこと興味ない」

答える蓮は本当にどうでもよかった。

それにおそらくというか確実に、政府との司法取引の結果だろう。

理子の件もあり想像はつく。

「それより――」

言葉が続ける蓮に少女はより一層の警戒と、なにがあってもすぐ動けるよう体勢を整える。しかし、

「続き、弾かないのかい？」

「……………何？」

策士の一族と呼ばれる少女は必死にその言葉の裏を読もうとしたが、読める筈などなかった。その言葉に他意などないのだから。

結局、さっきまで弾いていた曲を最後まで弾かされた。曲が終わると、窓枠から教室内の机に席を移したただ一人の観客から拍手が贈られる。濁りのない満面の笑顔だった。

「そんなに警戒しなくても、もうあんたを殺そうとはしないよ」

一片の濁りもなく『殺す』と口に出来てしまう事がなによりも恐ろしかった。そう、自分はこの男が恐ろしい。

ジャンヌという名を持って生まれた以上、彼女もそれなりの世界の裏というものを見てきたつもりである。しかしそれでも、ジャンヌは純粹にこの男が恐い。

一度殺されかけた。勿論それもある。

自分の力が一切通じず、魔剣をも素手で破壊してしまうような絶望的な戦闘力。

それらは確かに恐怖の理由でもある。

だがそれ以上に、彼女が蓮を恐れる理由がある。

彼女は政府との司法取引によってこの場にいる。本来なら拘束されて然るべき処断を受けるところだ。取引によってそれを免れている。当然行動などに制限は受けているが、逆にいえばそれは政府によって守られている事を意味する。もし彼女に手を出せば、政府は自分ではなく手を出した相手を処分する。

しかし目の前の男は違う。蓮はジャンヌが政府との取引によってこの場にいる事も充分想像できているだろう。手を出せば、自分に罰がくだる事も理解しているだろう。

その上で、彼はおそらく躊躇わない。躊躇うどころか、鼻歌でも唄いながら殺す。

どんな法もどんな罰もこの男には響かない。たとえ相手が国であっ

ても、世界であつても、蓮は構わないと考えるだろう。さらに恐ろしいのは、世界を相手にしたその結末が彼の勝利で終わってしまうと本気で自分が思っている事が何よりも恐ろしかった。

「どうかしたのか？」

黙ってしまったのを不審に思った蓮が首を傾げていた。とにかくいまは言葉通り彼に敵意はないようだった。それは何よりも運が良い。

「別に。それより、お前は何故此处にいる？」

ますます蓮は首を傾ぐ。

「てつきり理子の依頼とやらに付き合つてると思つたぞ。確かお前は、アリアやあの男とチームだと聞いていたのだが」

「今回は依頼主様のリクエストで仲間外れにされてんの」

はあー、と退屈そうに長いため息を吐く。

「……まずいな」

「あん？」

「おそらく、ブラド相手ではたとえ理子加わろうとも奴らでは勝てない」

ブラドの力は過去証明されている。それに同じ組織に身を置いた者としても、ブラドという存在は『怪物』だ。

まあ、いま目の前にいる男は『悪魔』なわけだが。

「お前がいればもしかやと思っていたのだが……」

「そうか。そりやあまずいな」

そついつて、蓮は入ってきた時と同じように窓に足をかける。

「待て！　いまから向かうつもりか！？」

今更この程度の高さから飛び降りる事など心配はすまい。

「間に合うわけがない。そもそも、奴らがブラドと戦うかどうかもわからないのだぞ？」

「そうになったらそうだったさ。特等席で、あいつらのじゃれあいを見める」

よっぽどこの数日が暇だったのか、目的が決まると生き生きとした顔になっている。

止める義理もなければ理由もない。

「なら少し待て。ブラドの弱点を――」

「必要ない」

「それは少し舐めすぎ……っ」

言葉は途切れた。続ける事が出来なかった。

「俺を誰だと思ってるんだ？」

こちらを振り返る蓮の空気に、氷の魔女はまるで凍りついたように体の機能が停止した。

自分は何を思い違いしていたのか。

自分程度に、口を出せるレベルにはない。

「あー、そうだ」

いざ飛び出そうとして、蓮は改めて振り返る。その表情は、数瞬前とは別人と思える程に違う。まるで子供のように無邪気な笑顔を振りまいて。

「ピアノ、綺麗だった。また聴かせてくれよ」

ジャンヌは言葉を失って立ち尽くす。その間に赤毛の少年は宙に身を投げ出して、一瞬で視界から消えてしまう。

それでもいなくなった彼の背を、ジャンヌは茫然と見つめる。

自身が策士であるが故に、常に相手の言葉を疑ってかかるジャンヌ。しかし、いまの言葉はなぜか素直に彼の本音なのだと思う事が出来た。

それはおそらく、彼が策など要する必要のない強者であると知っているから。

それでも、こんなにもストレートに褒められた事はなかった。少なくとも、残っている記憶にはない。

そうしてしばらく、呆気にとられたままジャンヌは開け放たれた窓から外を眺め続けた。

ジャンヌのいた音楽室の窓から飛び降りて、蓮は既に校門まで差し掛かっていた。

ふと、校門脇の壁に背を預けて突っ立っている人物が目に入る。

医者のような真っ白な白衣を着た女。それだけなら特におかしくなところは無い。が、女は間違いなく変だ。

白衣の下は何故か水着姿だった。パレオ付きタイプの真っ赤な水着の上に、無理やり白衣を羽織っているような女。

派手な色と魅力的な体の持ち主であるのも手伝って、あのまま街でも歩こうものなら男女問わない視線を集めることだろう。というか、此処にいる時点でその過程は終わった事か。

しかしそんな変態に興味のない蓮は一瞬たりとも足を止めずに駆け抜けようとする。

すれ違う一瞬、彼女は何かを呟いた。常人なら聞こえる筈のない程度だが、常人ではない蓮は造作もなくその音を耳で捉える。そして、止まった。

だが、振り返ったそこに、既に女の姿はなかった。

しばらく女がいた位置を眺めて、再び蓮はキンジ達のもとへ走り出す。

道や人に縛られない建物の上を自動車よりも速い速度で走りながら、いつまでも女の言葉が耳に残っていた。

「血に、抗う事は出来ない……………」

身に覚えのある言葉だった。

しかし蓮は、女を追わずキンジ達がいる館へ向かう。
いつしかその言葉も忘れてしまう。そう、思った。

ブラド

小夜鳴^{さよなき} 徹^{とち}。武偵高の非常勤講師で、キンジも数回だか教わったこともある。

そんな彼が、いま理子を踏みつけている。踏みにじり、踏み潰し、理子が泣き叫ぶ度に恍惚とした表情を浮かべている。

小夜鳴は言う。彼は絶望と共にやって来るのだと。

解答は、単純なものだった。

「彼が、来たぞ」

途端、雷鳴に呼応したように小夜鳴の体が膨張する。それはもはや彼の体格から異常としかいえないほど膨れ上がり、次いで、歯が鋭く剥き出しになり、手足の爪がナイフのように伸びる。

そこにいたのは小夜鳴ではなかった。

ガバメントを構えたアリアが体を震わせていた。

「まさか、あんたがブラド……？」

無限罪のブラド。イ・ウーナンバー2の犯罪者。

「ソノ通りダ。ホームズ家ノ人間力。オマエノ血、サツサト手二入

レテオクンダッタゼ」

「血？ …… そうか、あんたの正体はドラキュラ伯爵ね？」

「ソウダ。アラユル人間ノ血ヲ採取スル事デ進化シテキタ」

キンジは隙をついて弾丸をブラドに打ち込む。

しかし、突き刺さった弾は弾かれ、それどころか傷はみるみるうちに塞がっていく。

「傷が回復しているのか？」

「コノオレニタダノ弾ナド効クモノカ。強靱ナ体ニ明晰ナ頭脳。モ
ハヤ太陽デサエ克服シタゾ！」

喉を反らして大笑いするブラドは、たじろぐキンジ達には目も暮れず、足元に這いつくばっている理子の頭を掴み上げる。

呻き声を漏らす彼女を無視して、さらに高々と持ち上げる。

「ブ、ブラド」血だらけの口で必死に言葉を紡ぐ理子「オルメスを倒せば、自由にしてくれるって……」

「グ、ゲババババババ！ オマエハ犬トシタ約束ヲ守ルノカ？」

理子は愕然として、涙を流す。それは痛みから出ているものではない。

い。

悔しかったのだろう。従うしかなかった自分の無力さが。言い返せない無力さが。

悔しくて悔しくて、堪らない。

「諦メテ檻二戻レ雌犬」

滲んだ視界で、震える唇で、理子は今一度唇を噛み締める。

この言葉は卑怯だ。わかっているのに、溢れるように言葉は漏れる。小さな声で。

「助、けて」

しかしそれは確かにキンジ達の耳に届いた。

「言っのが遅い！」

アリアが小太刀を抜いて駆ける。傷は再生される。それでも、傷を与える事ができるなら、とアリアは理子を捕えているブラドの左腕を切りつける。

バランスを崩したブラドが理子を放す。キンジはそれをキャッチした。

「ガキ共が……」

苛立ちに満ちた声でブラドが唸る。

理子を救出し、改めてブラドと対峙するキンジとアリア。

ブラドのブレッシャーが今までの敵と桁違いなのは二人とも肌で感じ取っている。それでも退くわけにはいかなかった。

犯罪者は捕まえる。そしてそれはアリアの母の無罪を証明することに繋がる。だがそれ以前に、同じ武偵の仲間である理子を傷つけた目の前の男が何よりも許せなかった。

「ドウヤラ、遊び方ヲ教エテ欲シイミタイダナ」

ビルの屋上に備え付けられている避雷針を小枝のようにもぎ取る。

ブラドの弱点はわかっている。ジャンヌの話ではブラドの体にある目玉模様。四つあるそれを攻撃すれば、無限の再生能力を持つ奴を倒せる。それが本当なら、まだやりようはある。

「あの目玉を狙うぞ」

「でも四つ目は……」

「さっき理子が教えてくれた」

助けた直後、彼女は言った。ブラドの最後の弱点は、胸の真ん中。

「オレがそこと左肩を撃つ。アリアは右の二つを頼む」

頷くアリア。合図と共に、二人の銃口から弾丸が飛び出す。

アリアの二発は右肩と脇腹の模様へ。キンジの弾は左肩と中央へ狂いなく貫いた。

「グ……!?!」

初めて、ブラドはダメージを受けたらしくふらついた。

やったか？　だが、その考えはすぐに甘いと気付かされる。

ブラドは倒れることなく踏みとどまり、体を震わせる。決して痛みからではない。――嘲笑。

「オメデタイヤツラメ！　雌犬風情が、オレノ急所ヲ見抜ケルワケ
ネエダロウガ!?!」

「そん、な」

理子の顔からこれ以上ない絶望が滲み出る。この数年間、その全てが無駄だと思い知らされた瞬間だった。

「遊ビハ終ワリダ！」

ブラドは大きく息を吸い胸を膨らませる。

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

咆哮。

ただの咆哮ではない。まるで衝撃波のような音の塊に、体が吹き飛ばされそうになる。

「ドラキュラが吠えるなんて聞いてないわよ！」

怒鳴るアリアの声を聞きながら、キンジは愕然とした。己の体に起こった異常を思い知らされる。

「ヒステリアモードが、切れた？」

ブラドを見ると、人ではない面相で笑っていた。確信する。今の咆哮はキンジのヒステリアモードを解除する為にやったのだ。『ヒステリアモード破り』とでもいったところか。

「どうすれば……」

いまのキンジには何もわからない。ヒステリアモードの時のような
冴えも反射神経も持っていない。
ただ無為に引き金を引き続ける。だが当然、そんなものではブラド
の足を止める事も叶わない。

「キー君！」

「理子！？」

キンジを庇うように飛び出してきた理子。おそらく、自分の遺伝子
を欲しているブラドなら理子には攻撃してこない……そう考えたの
だろう。だが、

「ゲバババババー！」

ブラドは理子に構わず槍のように掴んだ避雷針を振り上げる。
もはや理子には、その価値すらないのだといわんばかりに。

理子諸共、キンジを貫こうと突起が唸りをあげる。

仲間の盾にすらなれない自分の無力さに涙しながら、理子は静かに目を閉じた。

「……………」

しかし、予期した衝撃はいつまで経っても訪れない。
不審がつてゆっくり瞼を開けると、そこには赤毛の髪を靡かせた少年の背中が広がっていた。
待ち焦がれた背中は、すぐ手の届くところにあった。

「レンレン……………」

涙混じりに彼の名を呼ぶと、彼はいつも通り不敵に頼もしく、笑って見せてくれた。

サード・ミッション・エンド

槍のように突かれた避雷針がブラドによって引き抜かれる。途端ボタバタと血が足元にシミを作った。

それから理子達を守るように立ち塞がった彼の横腹を避雷針が抉っていたのだ。

「蓮！」

悲鳴のようなアリアの声。一方で理子は声すら出せなかった。

自分を庇ったせいで、蓮が傷を負った。今回のミッションに彼を外したのはこうなることが嫌だったからなのに。

この少年が誰より強い事を知っていながら、自分は信じる事ができなかった。最後にブラドの恐怖がそれを上回った。

それなのに、結局こうなってしまった。誰でもない自分のせいで。

「理子」蓮は傷など感じさせないほどいつも通りの調子で「頼みがある」

「え？」

「いまからオレが時間を稼ぐ。その間にキンジ達を連れてあれに勝てる作戦を考えてくれ」

ブラドに、勝つ。

それは彼女にとって、何も使わずに空を飛べといわれるようなものだった。今回の一件で、元々刷り込まれていたブラドに対する絶望は絶対的になってしまった。もはや反抗心が完全にへし折られてしまった。

「無理だよ。あたしなんかじゃ……」グツと唇を噛んで「あたしは曾おじい様のような才能を受け継いじゃない。だから――」

「だから？」

蓮は真っ直ぐにこちらを見ていた。誰でもない理子を見ていた。

「お前は理子だろ？ 峰 理子だ。俺が知ってるあいつならそんな言い訳は絶対しない。劣等感剥き出しにしながらそれを隠して、鼻唄混じりに考えちまうよ」

その言葉が一体どれほどの衝撃だったか、理子以外にわからないだろう。言った本人でさえきつとわからない。

自分を認めてくれた言葉。

四世として認めたわけでもなく、ただ個人として認めたわけでもない。リュパンの名を背負った事をひっくるめた峰 理子に向けて放ってくれた言葉。

自然と涙は止まっていた。ともすれば別の理由で流れてしまいそうだったが、我慢する。

なにせ初舞台だ。リュパン家四世、峰 理子の大仕事なのだ。

「任せて」

答えると、蓮は笑った。相変わらず優しくない、不敵な笑み。

「雌犬程度ニ出来ル事ナンザタカガ知レテルガ、黙ッテ逃ガスト思
ウノカ？」

「なら追いかけてみな」

言うや否や、蓮はキンジとアリアの首根っこを引つ掴むと、あろう
ことかビル縁を囲むフェンスの向こう側に放り投げた。

さすがのブラドも、この予想外の行動に反応できないようだった。

理子が驚いたのは一瞬で、すぐさまキンジ達の絶叫を追ってビルか
ら飛び降りる。

理子の制服はパラシュートに変形する改造制服だと知っていたから
こそその作戦なのだろうが無茶苦茶だ。

蓮とすれ違う瞬間、理子は声を聞いた気がした。

『やっぱりお前は俺とは違う』

その声は蓮のものだった気がする。しかし問い返す時間は無かった。

次いで飛び降りる理子を見ても、もはやブラドは追いかける気はなかった。勿論それはいまだけの話だが。

それよりも、乱入してくるなり場をかき回してくれた少年。アリア達の反応を見ても、蓮が彼女達にとって絶対的な信頼を寄せている事は伝わってきた。特に、一度心をへし折った理子が、再びその瞳に炎を宿した。

ならば、この少年を彼女達の目の前で引き裂いてやったらどんな顔をしてくれるのだろう。

ブラドにとって蓮に対する興味はその程度だった。

「余計ナ手間ヲ増ヤシヤガツテ。邪魔ヲシテクレタ礼ヲシナクチャナ」

特殊な唸り声を発すると、陰から二頭の狼が姿を現す。ブラドが調教した犬達だ。

「何者ダカ知ラネエガ、オマエノ遺伝子ニハ興味が無イ。コイツラノ牙ニ引キ裂カレテ死ネ！」

さらに指示を出す。この少年の喉笛を搔っ切れ、と。
しかし、狼達はいつまで経っても蓮を襲おうとはしない。
狼達は尾を下げて怯えていた。ブラドの命令が絶対であると理解しながら、襲うどころか後ずさっていた。

「主人よりよっぽど利口な犬みたいだな」

嘲るように蓮が言う。暗い笑みを浮かべる少年に、ブラドもまた言い知れない感覚を覚えた。
しかしそれは断じて恐怖などではない。むしろ興味がわいた。

「少シオマエニ興味が出タ。ソノ遣伝子、調べサセテモラオウカ」

「その必要は無い。教えてやるよ」

出血する腹部で手をべったりと汚しながら、蓮は歌うように告げた。

「――」

それを聞いたブラドは大きく目を見開き、やがて大きくその口を引き裂く。

「ゲバババババ！ 面白い。ナラバソノ血、ドンナ手段ヲ使ッテデ

モ奪ッテ――」

一瞬で、ブラドの腕が引き千切られた。避雷針を掴んだ腕が、蓮の右手に無造作にぶら下がっている。

それを振り返って確認すると、思い出したように肩の断面から血の噴水があがった。

武器を奪われた。腕を千切られた。

しかしそんなこと、ブラドには関係ない話だ。

断面から即座に新しい腕が生える。この再生能力がある限り負けは無い。

よって、武器を奪われようと余裕は奪えない。

なにせ向こうは唯一の弱点である最後の模様の箇所を知らないのだから。

「見つける必要なんてねえよ」

薄く笑う蓮。直後、また衝撃が突き抜ける。数は三。

先ほど奪われた避雷針を蓮はその手でへし折り、短槍のようにして投擲したのだ。それらは弱点の三箇所を貫いている。

「馬鹿メガ。何度ヤロウト同ジコト――」

再び言葉は遮られる。

ザクン！ と四つ目の槍が胸の中央を貫き、あまりの衝撃に倒れたブラドをそのまま地面に礫た。胸の中央は弱点ではない。いくら攻撃されようとも四つ目の弱点が見つからなければ負ける事はない。しかし、もうブラドは笑う事ができなかった。

倒れた自分を見下ろすように貯水タンクの上に上った少年の手には、いくつもの破片が握られていた。

先ほどの避雷針の一部、砕いたコンクリートの瓦礫、ガラスの破片ありとあらゆる鋭利な物を掴み、蓮は見下ろしていた。

手始めに一つ、無造作に投げられたコンクリートの瓦礫が倒れたブラドの右足を貫く。そこは弱点ではないが、それがさらなる楔となつてブラドを縫いとめる。

次々とまるでダーツのように投げつけられる破片を、動きが封じられたブラドは黙って的看着となるしかない。しかしその行為が進めば進むだけ、ブラドは動けなくなっていく。

「マ、マサカ……」

自分の声が震えていた事にブラドは気付けなかった。

まるで塗り絵で白い部分を塗りつぶしていくように、投擲される破片たちはブラドの体を隅々まで刺し貫いていく。

この少年は弱点がどこかなんて考えちゃいない。弾丸と違い、一定以上の大きな物は一度抜かなければ再生しきれない。だからわかっている三箇所を常時貫いたままで、当たりを引くまで刺し続けるつもりだ。

自らの血に塗れた少年は、手についた血をまるでソースを舐めるように舌で拭う。

笑っていた。愉快に楽しく嘲るように、磔にされたブラドを見て少年は笑っていた。

ブラドは知っている。この状況を、この光景を何度も自分は見ている。た。

ただし、今までとは立場が逆だった。

ブラドが、絶望を感じる側。

「あー、無くなっちゃったか」

あらかたの物を投げ終えた蓮は呟く。その頃にはブラドの首から下はハリネズミのように歪な針の山となっていた。それでも、ブラドは生きている。

「本当に、しぶといなあ」

気怠そうな調子ではない。むしろまだ生き残っている事を喜ぶように蓮は口を引き裂いて笑う。

違う。ブラドは内心否定した。

おそらく彼はもう最後の模様の位置をわかっている。わかっている。まだ自分は生きている。生かされていた。子供が昆虫をなぶって喜ぶように。

蓮は貯水タンクからゆっくり降りる。そうして、足元に落ちていた小太刀を二本、拾い上げた。アリアの武器だ。刀を弄びながら、彼はブラドの顔を見下ろす。そうして片方を地面に突き立てると、

とブラドの右目をもう片方で貫いた。

「ガアアアアア、アアアアアアアアアア！！！！！！」

咆哮。しかしそれは最初と比べるとなんと情けないただの悲鳴だった。

「俺の血を取り込むって？」

間近でその絶叫を聞いても、蓮の表情に変わりはない。どこまでも残忍な笑み。

「無理だ。吸血鬼程度に、俺の血が制御できるわけがない」

どこまでもどこまでも酷薄な笑みを刻む。
 そうして突き立てたもう一本の小太刀を掴む。
 刃を下に、ブラドの顔を定めて構える。正確には、口内の模様定めて。

「待テッ！ 待ッテ——」

「ギャハハハハハハハハハハ！」 目を細めて「ゲームオーバーだ」

ザクン！！

作戦を考え急いで戻ってきたキンジ達が見たのは、屋上のコンクリートに無残に礫にされた無限罪のブラドだけだった。
そこに、志々島 蓮の姿はなかった。

サード・ミッション・エンド（後書き）

どうも作者です。ここまでの駄文を相手に閲覧ありがとうございます。

>とまあ、原作持っていない作者にとってアニメ参考にしたのがここまです。

ちよつと今回は演出が狂気じみてましたが。そんでまあ、ブラド編が終了。

次章で完結、という形になります。

だけでも注意が一つ！！

もう一度言いますが作者は原作持っていないため、次からはどうやってもオリジナル色が強くなってしまいます。もっとはつきりいえば、これまでに以上の駄文に加えたストーリーを展開することになります。

なのでオリジナルはごめんだZE！　ってな方はここまでで終わりにしておくことを強く勧めます。

それでも完結まで付き合ってくださいという皆様、心の準備をお願いします。

それでは、そんなに長くするつもりはないですがラストスパートも宜しく願います！

報告！！

どうもこんばんわ、作者の黒羊です。

とりあえず皆様メリークリスマス！

そしてそして、おそらく挨拶するタイミングが無いかもしれませんので、先走ってあげましたらおめでとうございマース！！

>どもども。それではさっそく報告を。

作者なんですが、やっぱりこのシーズンは色々忙しく、おそらくしつかり更新できないかと思われます。

バイトとか遊びとか遊びとか……あと、おまけで就活。

なんでまあ、とても申し訳ないですが一月頭ぐらいまで日が空いてしまいそうです。

一応パソコン開ける時に開いてちょこちょこ書いていきますが、亀更新がハイパースローモーションもビックリなスピードになりますんで報告だけさせていただきます。

こっちの作品はとりあえず区切り良いとこなんで、それだけは救いました。

ただ禁書以上に日が空いてしまってるのが不味すぎですが……。

まことに勝手ながらそれでは、皆さま良いお年を！！

脱退

ブラドを倒した。理子は解放され、アリアも無事、キンジも大した傷を負わず今回のミッションは大成功。その筈だった。ただ一人、彼がこの場にいない事を除いて。

懐の携帯が震える。キンジは相手といくつか言葉を交わしてすぐに切った。アリアが不安そうな表情を向けていた。キンジはいまかかつてきた電話の内容を告げる。

「小夜鳴……ブラドはとりあえず一命を取り留めたそうだ」

「そう」

アリアはひとまず安堵の息をつく。

あの日、キンジ達三人が再び戦いの場に戻った時、残されていたのは無残にも刃の雨によってコンクリートに縫い付けられていたブラド一人だった。不死身の体などまるで意味をもたない、弱点の模様を含めて体中を貫かれていた。

たとえ最後の弱点の位置がわかっていなくても、それこそ寸刻みに潰していけばブラドといえどどうしようもない。

それでも、意図的にだろうが、最後の弱点があった頭部だけは右目を除いて攻撃がされていなかった。だからこそブラドは生きている。

「蓮は？」

先程の嬉しそうな表情が消え、アリアが尋ねる。キンジは首を横に振った。

あのブラドをああも圧倒的に破壊したのはおそらく蓮だ。それだけの事ができる人間をキンジ達は彼以外知らない。しかし彼はそこにいなかった。

瀕死のブラドを放置して、部屋にも戻らない。

蓮はあの日から消えた。

振り下ろした小太刀はブラドの顔のすぐ横を貫いた。ブラドはだらしなく口を絶叫の時のまま開いて気絶している。地面に突き刺さった刀の柄から手を離す。

「さすがねえ」

パチパチと手を叩く音。そして若い女の声。

声の主は貯水タンクの尻を乗っけていた。白衣の女。ただしその下には真っ赤なパレオの水着を着ている。頭には暗緑色のバンダナをかぶり、蠱惑的な微笑を浮かべていた。

見覚えがある。確か学校の門で突っ立っていた女。

「誰だ？」

空気を凍えさせる程の殺気が籠った問いかけ。しかし女性はそれが心地良いというようにますます笑みを深める。

それなりに高い位置から苦も無く飛び降りると、無防備な様子で近付いてくる。そうして、右手を伸ばし蓮の頬を撫でると自ら顔を近づける。

いまさら美女の顔が間近にあつて狼狽える蓮ではないが、女性の方はうつとりした瞳を投げてくる。

「いいわ……その眼」

血に塗れた蓮の頬を撫で上げ、女性は血に汚れた自らの指を舐める。動きの一つ一つが官能的であり、彼女は頬を朱く紅潮させる。

「やっぱり貴方は真っ赤な血に塗れている方が似合っているわぁ」

「だから誰だよ、あんた」

「だというのに貴方は……」

こちらの話は一切聞いていないようで、女性は勝手に話を進める。

「武偵なんていう、退屈で無価値で下らないものになって……。貴方にはあんな場所似合わないわぁ」

「耳がイカれてんなら口の動きを見る。だ・れ・だ」

さすがに苛立ってきた蓮だったが、女性は白衣を翻してようやくこちらを見た。

「誰ですってえ？ そんなの決まっているじゃない」

女性は口を引き裂く。

「——貴方の母親よぉ」

キンジ、アリア、白雪は教務科^{マスタース}の校舎へやってきていた。つい先ほど呼び出しがあり、個人ではなくチームとして呼ばれたのだ。指定された部屋に入ると女性教師が一人座っていた。

「来たか。まあ座れ」

くわえていた煙草を灰皿に押し付けて、顎で反対側のソファーを示す。未だ呼ばれた理由もわからないキンジ達は、とにかく言われるまま座る。

座ってから、教師は新しい煙草に火をつける。呼び出しておきながら、教師はなかなか話を切り出そうとしない。

我慢しきれなかったのは、いつもながらアリアだった。

「先生、用というのは何なんですか？」

直接的にそう問いかけられても、教師は話そうとしない。無為に紫煙を吐き出し、長かった煙草がすぐに短くなる。

いよいよ尋常でないと感じ始めて、再びアリアが口を開こうとしたとき遂に教師が口を開く。

「志々島は武偵校を辞めた」

「な……っ」

『なんで』そう言いかけて、しかし教師の方が早かった。

「いや、正確には強制退学だ。ある事情から、此处に志々島を置いておけなくなった」

「なんで!？」

「私の口から事情は話せん。だが、お前達は奴とはチームメイトだった。だからこれだけは教えてやる。ヤツは——人を殺した」

アリアも白雪も、そしてキンジも言葉を失った。武偵は武偵法と呼ばれる武偵の行為に対する法律が存在する。そしてその九条には例外を除き殺人禁止が記されている。それを蓮は破った。つまりそれは、彼が犯罪者となってしまった事を意味していた。

「うそ……」

ストン、と腰を下ろすアリア。教師はこれ以上の質問を拒否するようにつっくり瞼を閉じる。

アリアを支えてキンジ達が退室する。

「キンちゃん……」

白雪が心配そうに声をかけてくる。『大丈夫だ』と答えたものの、自分自身相当動揺している事を自覚する。

あの蓮が人を殺した。それも強制退学を命じられるとなると、正当防衛が発生する状況ではなかったということだ。それは例えば、相手が一般人であったり。

そんなことは——そう頭の中で思いながら、キンジは心の底からそれを否定してやる事ができなかった。

思い出される彼の殺気。それは獣のような生きる為の敵意ではなく、人間だけが発する知性による殺意。心臓を握り潰されそうになるあの壮絶なブレッシャーを。

「きつと何かの間違いよ」

支えた腕の中で少女が言う。

「だってそうでしょ！？ 確かに蓮は凄い力を持っていたけど、今まで一度も犯人を殺したりしなかったじゃない！」

「けど事実なんだよねー」

振り向くと、そこにはつい先日共に死闘を乗り越えた少女がいた。

「理子？」

「やつほー、キー君」

脱退（後書き）

改めて、明けましておめでとうございます。

皆さまは良い夢は見られましたか？ 黒羊は昨日ようやく見られた夢が、ひたすらチキンステーキを食い続けるなんていうフードファイターなものでした。

起きたらお腹いっぱいです。

新年初の投稿となりますが、今年もどうぞよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2198x/>

緋弾のアリア 世界は俺のモノ

2012年1月4日03時45分発行